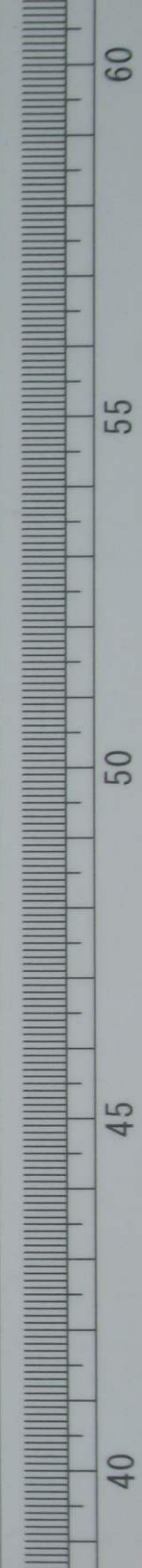
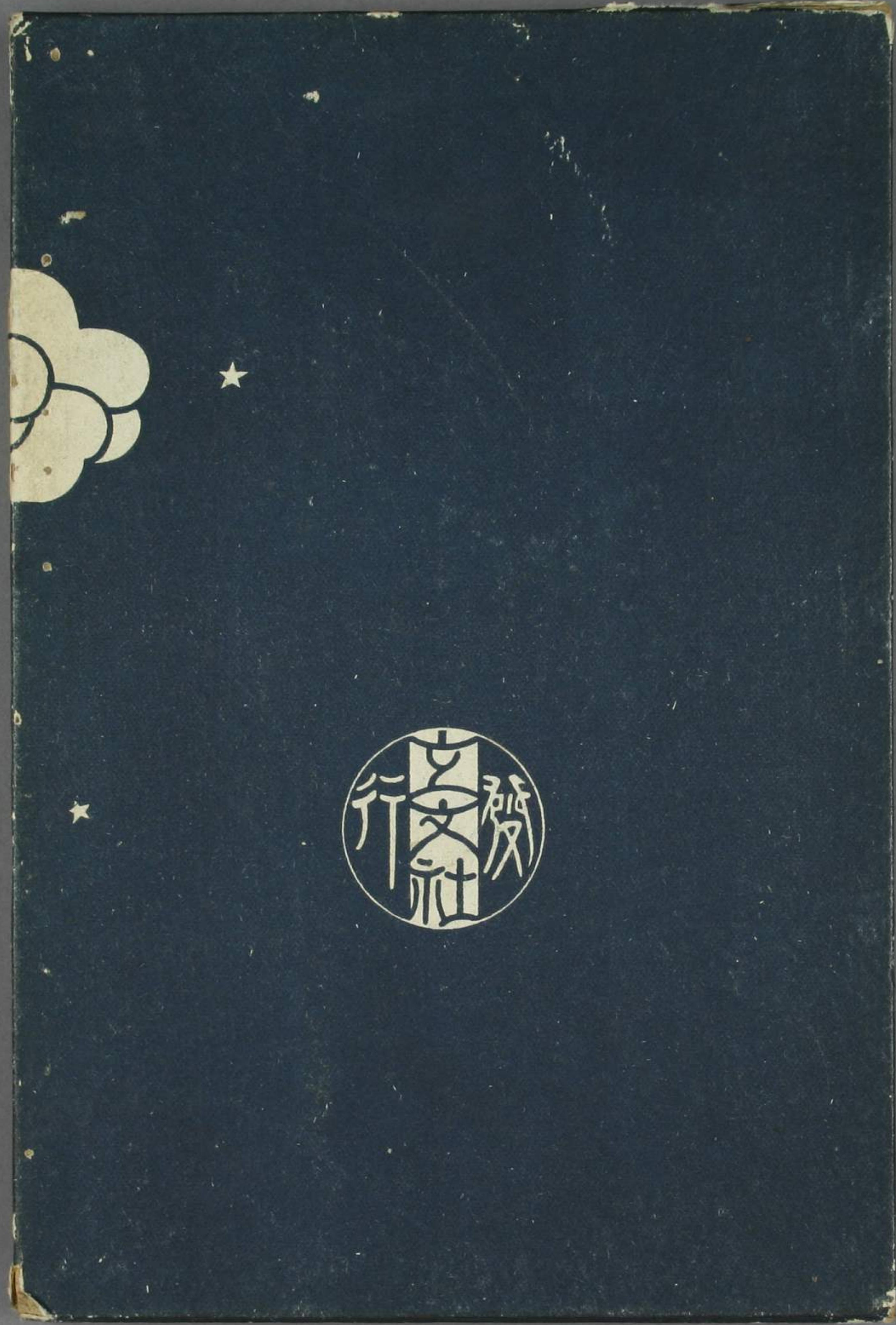
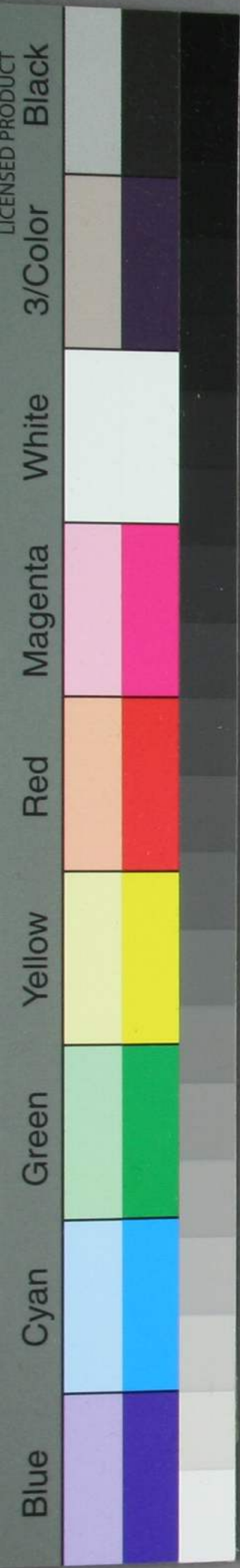


後
の
行
者

遂
邊
着



LICENSED PRODUCT
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue
Black

चिंतीरंज

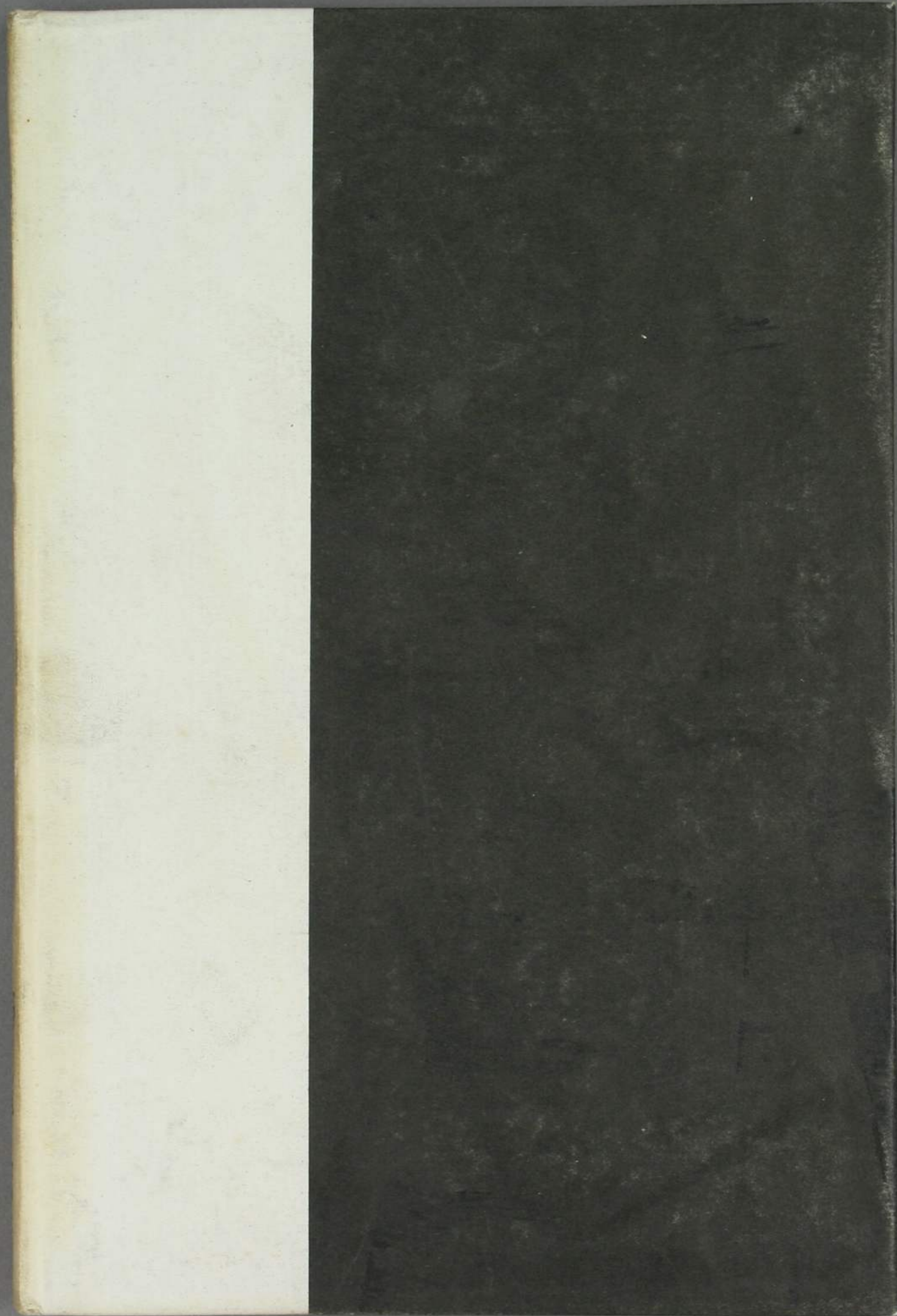
ॐ सु सु



60
55
50
45
40

後の行者

逍遙著



古本區經一
海象

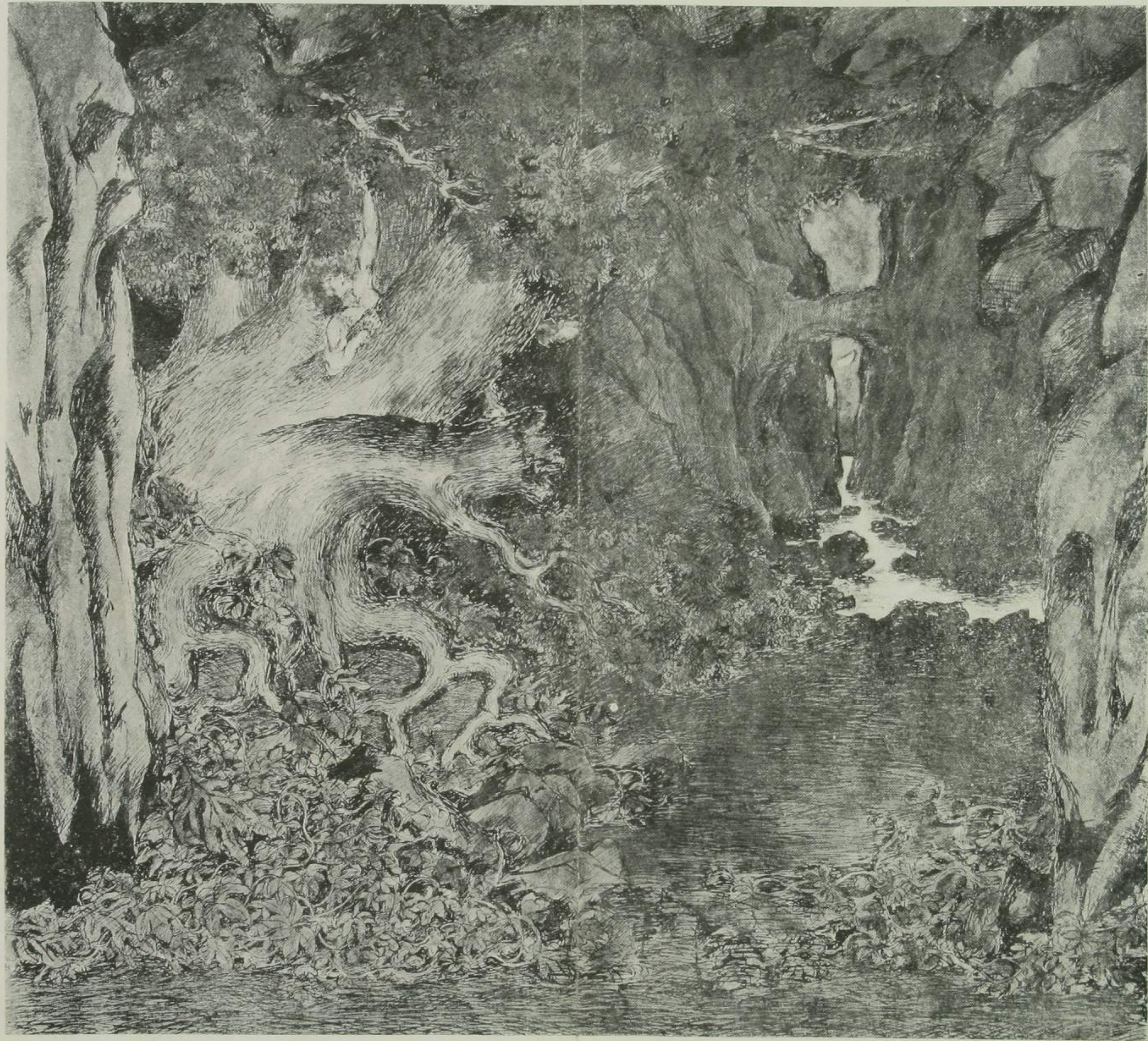
ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

57 4097





京都市上區聖護院所藏絹本
 役行者及八大金剛童子像
 原傳智證大師筆
 稱像中最古物



京都市上京區聖護院所藏絹本著色
 役行者及八人大金剛童子像
 原傳智證大師筆
 稱像中最古物

序

明治十六年の夜明けがた以來、自分は随分あちこちとうろつき廻つてゐたが、それは、大抵、自分が辿るに適した路筋でなかつたのみならず、行きたいと思つてゐた方角でもなかつた。いはゞ、境遇に驅られて、心ならずも放浪の旅を續けてゐたのである。で、用を頼まれて、他の爲に、一時間ひよの間に四ヶ所、五ヶ所以上の處へ自轉車で往來したこともあれば、前後三四時間の間に、全く相反する遠い方角へ汽車旅行をしたこともある。つまり、唯の一度も、一意專念に、同一の目的地へと志したことはなかつた。いや、出来なかつた。日がもう暮れかけた今となつて、やつとの事で、心任せになる閑暇を得たが、あゝ、もう大分雀色時になつてゐる！ これから出かけるとして、果してどこ

まで行かれるか？

併し、ともかくも、豫定の方角へ出かけて見よう。ともかくも、今踏み出す此
一步は、自分の旅の追分である。だから、此細短かい榜示杭を、後の目じるし
までに、爰に立て、おかう。

大正六年三月廿四日

文藝協會解散當時の舊稿に多少
の改修を加へて公刊するとて

始終道遙人

役の行者

序幕

第一場

山村路

大和國吉野郡大峰の麓、今の洞川村邊から餘り遠くない處の
見渡す向う一帯に樹木の繁茂した山や阜が、遠く近く波打つ
てゐる。細い川が流れてゐる。大天井小天井などいふ峻し



二
い峰々も見えぬ。阜の間々に三四軒の千木を高く聳えさせた杉皮葺が見え、又所々に稲田がある。今ちやうど大陰暦の八月下旬なので、早稲は已に刈取り、田は刈跡になつてゐる。時代は文武天皇の朝、時刻は今の午前十時過。
右手(上手)から旅の者らしき主従の男女が出て来て、下の問答をしながら、左へと通り抜ける。女は賤しからぬ服装で、齡は八十歳位、品よき容姿、盲目で、腰は殆ど二重になりかけてゐるが、夫でも杖を突いて、徒歩してゐる。男は卅年輩で、實體さう、一劍を腰に佩び、

青蟲
布ぬので包つんで革かわで巻まいた旅荷物らしい物を背せ負おひ、片手かたてには笠かさを持ち、片手かたてでは老女らうぢやの手てを牽ひいてゐる。此この從者じゅうしやの名なは青蟲あをむし。だんく瓜先上つばさきあがりになりまする程ほどに、嘸さぞお草臥くたびれなされたでござりませう。手前てまへの肩かたにお掛かりなされませ。ちとお負おひ申ましませう。

老女
いやく、まだそれには及およばぬ。したが、近ちかくに人家じんかはないかなう。ちつとの間休息ひきやすしたい。

青蟲
へいへい。(左手ひだりてを見みやりて) 彼處あそこに一軒家けんやが見みえまする。たかゞ八九町程ちやうほどでござりませう。

老女
では其處そこへ案内あんないしてくりやれ。
青蟲
かしこまりました。斯かうおいでなさりませ。

主従しうじゆうが通り抜けてしまふと、殼竿からざの音おとが頻しきりに聞きえて、次つぎの女聲をんなごゑの稻打唄いねうちうたが洩もれて來くる。間々あひまにエーイエイと女をんなの聲こゑで掛聲かけごゑ

をやる。

唄へおオらが背戸の柿の木に、エーイエイ、今年や柿の實がよくなつた。なつたともく。

エーイエイ……

唄の半ばに局面が一轉する。

第二場

山麓の一軒家

同じく大峰の麓今の洞の辻附近らしい。間近く左手に寄つて、一軒の古風な農家がある。間口はやつと二間半ぐらゐ、見えてゐる奥行は二間、家根は千木を聳えさせた杉皮葺。左手は葺降して小さな物置兼帯の背戸への通路が附てをり、其

入口には菰が垂れてゐる。母屋の奥も幾枚かの菰で見切り、其他は開放し。中央に爐原始的な自在に釜のやうなものが掛けてある。物置の後には竹藪があり、母屋の右手の奥には一本の柿の木、實が赤く熟してゐる。つい其傍に算水が溜か外へ清らかに流れ出して小川へ落ち込む。實は、此算に面した二間間口が此家の入口なので、所謂入妻形の葺かたになつてゐるのである。

右手は山の裾で見切られ、見渡す正面は遠近の山々、いづれも樹木が繁茂して居り、間近き阜の此方には刈跡の稲田が少し見え、其稲田の手前には清らかな小川が流れて居り、無雑作に丸太を二三本並べた橋が、洞の辻への往還に架つてゐる。此小川に沿うて田圃へ通ふ路が一筋、右手へと走り、間近の山の裾で隠れてしまつてゐる。農家の上り口——幹を皮附の儘輪切にした奴——に近く、主人ら

しい六十五六の爺が、古風な原始的の竹の稻扱機で、稻を扱いてゐる。それよりも右手、殆ど往還を占領して二人の若い娘が、穀竿を揮って、唄を歌ひながら、稻を打つてゐる。これは姉妹で、姉は十八九、妹は十五六、二人とも標致よし、日に焼けてはぬるが、本来は色白である。姉の名は比豆、妹の名は江布利。稻打唄が續く。

唄

九つ小枝に皆實つた。 エーイエイ。 色づいた。 たアれに食はしよと色づいた。 ヨイ〜ヨイトナ。

唄が切れると共に、二人とも穀竿を下して、息を吐き、頭に結へてゐた布片を取つて、汗を拭ふ。爺も手を休めて

爺

さア〜、きつかつた〜。 ……まア〜一休みせいと云ふところぢやが、今日は朝の間から變な空模様で、今にもほつり〜降ちて來さうぢや。午前にしまはぬと事ぢや程に、姉は、早うお母さの處へ往て、刈りためただけ

姉

を取つて來いやい。 早うせい、早うせい。 あい〜。

と姉は、とつかは丸太橋を渡つて、田圃道を右手へと姿を消す。妹は箕を物置から持出して來て、打ち溜めた糶を掻集めにかゝる。と突然に大ドロ〜。 妹はびつくりして箕を落す。

妹

あれ、地震ぢや!

爺

いや〜、地震ではない。(ドロ〜尙つ〜) これがソレ昨夜話した、あの大峰さまの山鳴ぢやがや。

爺

え、では、あの山の主さんの祟とやらかえ? (うなづきながら) どうか甚いことにならねば可いがなう。

爺が、框に腰を掛けると、娘も箕を抛出しておいて、同じく傍へ

来て腰を掛ける。

妹

お父さ、わしや、あの昨夜の話は、役のお行者さまが、葛城山の何處やらから餘所のお山の何處やらへ、磐橋とやらを架けさつしやる處までは聞いてゐたが、だんく怖らしうなつた故、指で耳に栓を支うて、つい知らん間に眠てしまつた。したが、晝間なら怖うはない。もう一遍話して下され。いやく、聴かいでおけ、又夜中に魘れうぞい。どうやら、山鳴は止んだらしい。(と言ひながら、二三歩外へ出て空を見て) いやく一雨來さうぢやわい。

爺

此途端に、田圃道づたひに、六十近くの婆、姉娘と一しよに、刈りためた稻を背負ひつゝ、急ぎ足に戻つて來る。

爺 婆

(丸太を渡りながら) きつゝい山鳴ぢやつたなう。ちやうど十五年ぶりぢや。(むづかしい貌をして) 此間中の遠鳴といひ、今の甚大い鳴りやうといひ、こりや何か西谷あたりで、事があつたに相違ない。

婆

何にせい、役のお行者さまはお不在、前鬼さん、後鬼さんまでござらつしやらんといふから、きつと、あの山の神さんが荒れ始めさつしやつたに違ひない。

妹

(先刻からいよく目を圓くしてゐたが) 十五年前に如何な事があつたえ、え、お母

婆

山籠りをしてゐた若い行者衆が、二人までも、洞川の川上から、死骸になつて流れて來た。ちやうどそれが、今のやうな山鳴の翌日で、其時にもお行者さまはお不在ぢやつた。

姊

(心配さうに) 若い行者さんと言や、あの都の若行者さんに、怪我でもなければ可いかなア。

妹

姊さ、都の行者さん言ふは、あの去年山籠りさつしやつた、あの色の白い、目の涼しい、優しい人かえり?

姉 うん。親御衆と仲たがひして發心したといはつしやつた、あの品の可い若いお人。(と、ちつと考へ込み) あゝ、わしや昨夜話を聞いてから、あの人の事が氣になつて、風が甚う吹いて來てさへも、怖うてならぬ。

此問答の間、爺と婆とは何か小聲で話してゐたが、

爺 こりやいよ、雨らしいによつて、もう今日は、何もかもしまつた、しまつた。

婆 もうかれこれ晝ぢや。姉や、おのしは米磨いで、午飯の支度してくりや。

姉 あい。

姉は小桶を奥から取出して來て、笥の傍で米をかしぎ、次の話の間に飯を焚く支度よろしくある。爺と婆とは稻を背戸へ運んだり、稻扱機械其他を片附けたり、何かと忙しい。妹は、それを手傳つて片附けながら、

妹 お父さ、山の鳴る仔細を話してくだされ。山の主さんたらいふは何ぢや

え?

怖い程に聞かいでおけ。

いえ、わしや聞きたうてならん。お母さ、お前聞かしておくれいな。

(片附物をしながら) ぢや聞かさう程にの、早うそれを片附けてしまや。

あい。

爺は奥へ入り、婆は、やつと框に腰をおろす。

あゝ、辛度や。

(同じく腰をかけて) さ、話してくれ。

おのし達はなア、晩う生れたによつて幸福ぢや。おら共の若い頃までは、こいらは、それは、怖い恐ろしい處ぢやつたぞよ。此界限十里四方といふものは、山で無い處も深藪のやうに草や木が繁つて、田畑もなく、人家ら

しいものは、只の一軒もなかつた。狼が晝日中うろつく。蟒蛇がのたくり廻る。そればかりでない。山猫ぢやの、狒々ぢやの、荒熊ぢやの、猪ぢやのいふ猛獸が、野にも山にも、のそくと歩いてをつて、そつとでも人間の臭ひがすりや、直に跳び出して来て、取つて食うたものぢや。それを思ふと、今の此安らかさは、みんなくお行者さまのお庇ぢや。これで若しあの葛城山の磐橋さへ出来上つてゐようものなら、どのやうに人間の幸福が殖えたか知れんに、惜しいことであつた。

妹

磐橋の事よりも、わしや山の主さんの話が聞きたい。せはしない。これからがその話ぢや。……

婆

此問答の間に、爺奥から出て来て、胡坐をかき、湯か何かを飲んで話を聞いて居り、折々口を出す。

其山の主さんといふは、名を一言主さんというて、今から三四十年前までは

爺

此界限きつての荒神さんでなう、それがまた毎日毎晩何遍となう、猛しい獸類の生膽を食はつしやらんでは神通力が弱る神さまぢやげなで、それで其都合で、わざと此邊一圓に、猛しい獸類を蕃殖しておかつしやつたものぢや。人間の爲には、それが何位迷惑になつたか知れん。月に二三人ぐらゐは、きつと獸類の餌食になつて、非業の最期を遂げたものぢや。役の行者さんがござらつしやらんだら、此大和一圓人種が盡きたかも知れん。

婆

それから、其一言主さんのお母さんに、葛城の神さんといふ、我強い、執念深い、怖しい女神さんがあつてなう、其女神さんがまた業通が自在なので、此界限の何處の山の主さんも、又森や河や池や沼の精靈さんたちも、此母子の神さんには抵抗くことが出来ず、言ふなり次第になつてござつたので、親子の神はいよく増長して……

妹

お母さ、お前一言主さんを見たことがあるかえり？

何の！ 今生きてゐる者で、見た者は一人もない。昔からの傳説では、丈が一丈もあつて、顔や手や胴は人間ぢやが、胴から下は牛のやうでもあれば、熊のやうでもあると言ふことぢや。

あの活神様の行者様のお行力でなければ、逆もあの母子神をば祈り伏せることは出来んのぢやつた。行者さんでさへ八十一晝夜かゝつて祈り伏せさつしやつたげな。

それは、甚い荒行をさつしやつたげな。それからは行者さんは、母子の神を御眷屬同様にさつしやつて、人助けの爲にとて、先づ手を著けなされたのが、あの磐橋ぢや。

今、半端のまゝで残つてゐるとやらいふのがそれかえり？ さうぢや。葛城山から金剛山への道は、逆も、並の者では通ふことの出來ん嶮岨ぢやが、それを年に十五六遍も往來するやうにならんうちは、一は

しの行人とは言はれんことになつてゐたので、昔からそれを爲うとして命を落いた者が、何百人あつたか知れん。お行者さまが、それを憫然に思はつしやつて、一言主さんに吩咐けて「おのし改心の證に、おのしの眷屬は勿論、此界隈の山の主たちを残らず使うて、とつと、磐橋を架い」と言はつしやつたげな。さ、それからといふもの、夜も晝も、人間の目にこそ見えなだれ、神たちが神通力で、小山のやうな大岩を幾つも、運ばつしやる、積まつしまる、疊まつしやる、見る、谷と谷との間に連絡が附いて、不思議な岩の橋が出来かけたげな。

とつと、磐橋を架い」と言はつしやつたげな。さ、それからといふもの、夜も晝も、人間の目にこそ見えなだれ、神たちが神通力で、小山のやうな大岩を幾つも、運ばつしやる、積まつしまる、疊まつしやる、見る、谷と谷との間に連絡が附いて、不思議な岩の橋が出来かけたげな。

とつと、磐橋を架い」と言はつしやつたげな。さ、それからといふもの、夜も晝も、人間の目にこそ見えなだれ、神たちが神通力で、小山のやうな大岩を幾つも、運ばつしやる、積まつしまる、疊まつしやる、見る、谷と谷との間に連絡が附いて、不思議な岩の橋が出来かけたげな。

あつたのぢや。

といふのはえり？

人間のお行者さまに使はれるのが悔しうてならんのおやげな。それにお母の葛城さんが傍から煽り立て、磐橋の邪魔ばかりではなく、機を見てお行者さまを殺してしまはうと企んでござるのが知れたので、そこでお行者さまが、呪縛いふことを行はつしやつたげな。

呪縛いふは如何することぢやえり？

されば、お行力で、西谷の奥の大樟の木の股へ、山の主さんを挟み込んでしまはつしやつたのぢや。それから又行者さんは、西谷の四方七町の間を結界して、並の者は勿論、樵夫でも狩人でも、行人でも、それから奥へは決して一足でも踏込むことはならん、覗いて見ることもならんと掟さつしやつた。それからといふもの、悪い獣もゐず、荒神さんも鎮まり、此界限がだんく

妹 婆

妹 爺

開けて、畑の物も出来りや稲も出来て、こんな住みえい處になつた。それは今から三四十年も前のことぢや。

が、兎角怖い物は見たいもの、爲なといふことは爲たいもので、其當座には、大抵五年目に一人位づゝ掟を犯いて、そつと西谷へ覗きに往つては、二つとない命を落したのぢや。それがだんくに少なうなつて、西谷の噂をする者もなく、此十五年の間は……

此話の間に又もドロくが聞えて来る。次の問答の間、それが激しくなつたり、微かになつたりして續く。

や、又山鳴ぢや！ 此様子では十五年前よりも甚い事になるかも知れん。

第一場の旅の主従が右手(上手)から出て来り、農家の前へ来て立止る。

ちと御無心がござる。主人の御方が、いかう草臥れさつしやれてござる。

婆 爺

婆

爺

何卒暫時の間休息させてあげて下され。

爺 心易いことぢや。さア〜、こちへ掛けさつしやれ。折わるい空模様ぢや

に、どちらへござらつしやりますか？ これからは爪先上りで、お年寄には難

儀な路ぢやに。

主従 柵に腰を掛ける。

青 大峰の奥まで參るのでござるが、して此許からはもう何程ござるなり？

爺 めつさうなことをいはつしやりますか！ お山へは女人は禁制。さうでなう

ても、いつかないかな、女子の身では年若でも行かるゝ處ではない。それに

アレ、あれを聞かつしやれ。きのふけふは、あの怖ろしい山鳴ぢや。血氣壯

んの者でも、もうけふからは、木を伐りにも行まれますまいわい。

老女 いや、其嶮岨は、豫て聞いて、覺悟の前でござる。女人禁制の事も心得たれ

ど、役の行者どには深い由縁もあり、心願あつて、はるぐゝの處より、盲目

爺 同然の身で、尋ねて來た者。たとひ今日は登られずとも、明日は剛力衆を雇
うてなと、お山登りをせねばならぬ。氣の毒ながら、こよひ一夜、此家に泊
めてはおくりやるまいか？

どうした心願や由縁がござらつしやるか知らんが、それは逆も叶はんこつ

ちや。肝腎の御本尊さまがお不在ぢや。

青 えッ！ 役の行者さまは？

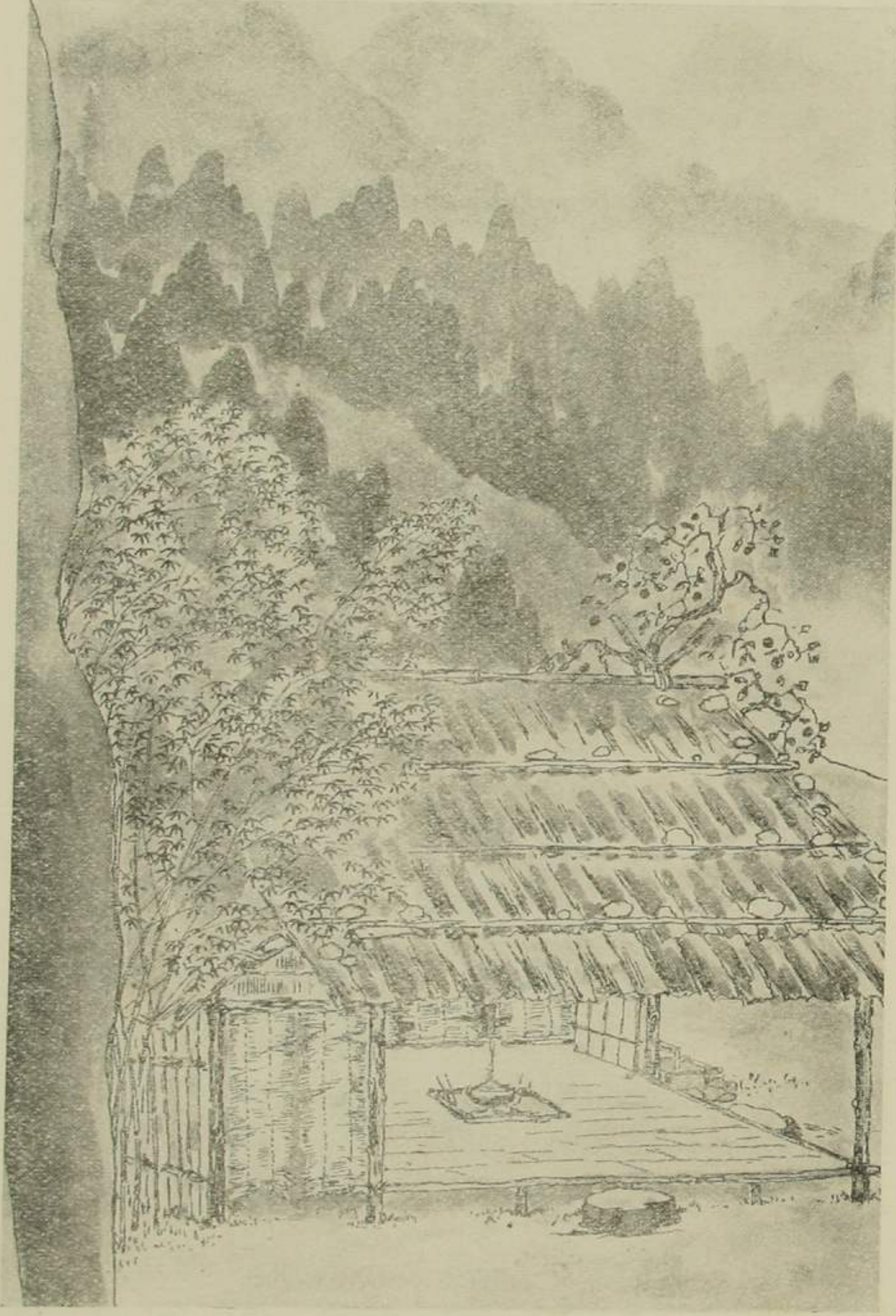
婆 とうから遠い〜處へ往かつしやつてゝござります。

老女 なに、行者どのは、今は山にをられぬとや？

婆 お行者さまがござらぬばかりでなく、お使はしめの前鬼どの、後鬼どのもご

ざらつしやりませぬ。それなればこそあの山鳴ぢや。

旅の主従は顔を見合せて、溜息を吐く。山鳴は薄くなつたが
尙續いてゐる。



青 前鬼どの、後鬼どのとやらは、豫て噂に聞いた、お行者のお傍仕への人達ぢやな？

爺 いや、人ではない。成程、もとは人間であつたのぢやが、大事の我兒五人まで非業に亡ひ、それから氣が狂うて、最ち末が死んだ時、其死骸を食うてしまうて、夫婦とも生身のまゝで鬼になつたのが前鬼どの、後鬼どのぢや。

婆 お行者さまのお功力で善心に立歸らしやらなんだなら、一生、狒々や狼同様に、人間を食うて果さつしやつたであらうのに、今は無二のお使はしめぢやげな。せめてあのお二人がござらつしやりや、よもや山鳴などは始まりやすまいに。

青 他に、お行者のお弟子としてはござらぬか？
婆 たつた一人をられます。五人六人とお傍にござつたこともあつたが、何に

老女 せい荒行ゆるゑ、辛抱が出来ず、みんな途中で下山してしまはつしやりました。
(頻りに聞耳立てゝゐたが) あの鳴音は、何でござるの？

爺 されば、あれがソノ……

と云ひかけた途端に、樵夫らしき三十年輩の男、名は牛鞆、左の山手から急ぎ足で降りて来て、橋を渡るや否や、大きな聲で、

牛鞆 事ぢや〜！ 若いお行者どのが川へ陥らしやつた。

姉 えッ！ 若いお行者さんが！

牛 今朝もなア、例の通り、赤脛や毛面と一しよに、おれも仕事爲に出掛けては見たが、山鳴で膽を潰し、七曲りから引返して、洞の辻まで来ると、上の瀬に、何やら白い物が岩の間に挟まつてだぶついてゐるのが見えた。どうやらそれが人らしいので、降りて行つて見たところ、案の定、人ぢや。人も人、去年山籠りした、あの都の若行者ぢや。

姉 えッ！ あの都の若行者さん！

妹 あの色の白い、目の涼しい……

牛 さうぢや。あの生優らしい若い男ぢや。

爺 はれまア！

姉 いや、主さんが荒れだしたのぢや。

牛 そして最早助からんかいな？

爺 いや、まだ助かるかも知れん。少しは胸の處に温みがある。今赤脛と毛面

が裸體にして水吐せてゐる。が、息が出たからというて、こゝまで歩ばせる

ことは覺束ない。戸板でも一枚借してくつさい。もし生返つたら、そつと

臥して吊つて來う程にの。それならば、あの雨戸が可いわ。江布利や、早脱して持たせてあげいやい。

姉も妹も一しよに起上つて、算側の戸袋から雨戸を脱しにか

婆

牛

姉

爺

婆爺

牛

妹

姉

かる。山鳴全く止む。

爺 どうか助かれば可いがなう。

老女 その都の行者とやらは、名は何といふ人でござるの？

爺 たしか何の廣足さんたらいうた。何でも都のお歴々の息子さんぢやげなが

色戀の事で親御達と甚い争論をして、それが原で發心さつしやつたとやら

いふ噂ぢや。

此中に、娘らは雨戸を樵夫に渡す。

牛 では一寸の間借りて行きますぞや。生返つたら、兎も角も、こゝへ伴れて來

う程に、休ませて下され。

姉何やら妹に耳こすりをする。

妹 お母さ、わしらは往つて見て來るぞえ？

婆 早戻つて來いよ。

婆

妹

牛

爺

老女

爺

娘ら樵夫に従いて橋を渡り、左手家の背へ消える。爺婆も思はず起上つて娘らの後影を見送る。

老女

(青蟲に向ひ) 定、其若行者といふのは、あの韓國の連どの、秘藏子に相違ない。親の心をば子は知らず、限りない心づくしの恩を仇に、五年以前家をば脱出して、けふまでも何の便りもせず。母御はそれが爲に泣死。さては此山に籠つてゐたのぢやなう。

爺

(席に戻りて) お母さまは、その廣足さんの身寄で、いもござらつしやるかなり？

老女

いや、今は何をか包みませう？ わしは役の行者小角の母でござる。

婆爺

えッ！ お前さまがや！

老女

思ひ出せば、今からは六十二年以前、わしが十八の時の事、癸の巳の三月、天から獨股杵が降つて来て口中に入ると夢を見て、懐妊し、生落したのがあの行者どのでござる。

婆爺

はれまア！

老女

名を小角と附けしところ、赤子の時から、凡人とは、面相も智慧も異うて、十三の頃からは、誰に學ぶともなく、佛の教を知り、十七歳で河内の國金剛山に登つたのが修行の始めで、三十八の年には、亡き所天どの、許諾を得て、あの葛城の峯に分入り、數々の苦行功積んで、嶮山魔所をも踏開き、業通無碍の身となり、活神と崇められ、諸人を濟度し、世間を利益すると、傳へ聞くは嬉しけれど、夫には早く別れ、頼る方もない老の身は、我子戀しくなつかしく、憧れ泣かぬ日はござらぬので、いつしかに目を泣きつぶし……

と堪へかれて泣入るを、青蟲いろく介抱する。爺と姿は呆れて聽いてゐたが

爺

やれ、活神さまのお母様さまぢやとは氣が附かなんだ。やれ、勿體ない勿體ない！

婆

勿體ない、勿體ない！ まア〜、こちへ上らつしやりませ。まアまア。

青

あのやうに申します。ま、兎も角もお上りなされませ。

爺婆介抱して老女を席に着かせる。

老女

もう餘命も永うはあるまい。せめて只一目、只一聲、我子に逢うて最期の言葉を言ひ交して死にたいと、はる〜と来て見れば、此山には居らぬといふ。よく〜母子今生の浅いえにし。此上は、迎も土とならば、同じくば此山の土とならうずる。やい、青蟲よ、今ちやうど此山に妖變があるこそ幸ひ、おれを此山の奥へ負うて行き、何處になりと棄て置いて去んでくれ。熊狼の餌食ともなつて果てようわいなう！

と泣きくづれる。

青

それは餘りの御短慮と申すものでござります。何の、いつまでもお歸りなされぬこともござりますまい。此家の主人に頼み残し、行者御歸山あらば、

婆

やがて知さすやう計らひませう程に、まア〜お心をお取直しなされませ。さうぢや〜。天眼通の行者さまぢや。きつとお前さまのござつた事も山の主さんの荒出した事も、今に知つて歸らつしやりませう。今日程は、なアお父さ。

爺

さうぢや〜。けふ程は堪へて歸らつしやりませ。泊めてもあげましたいが、此通りの貧乏屋、夜の物も餘分にはない。蓑笠だけは借して進ぜる程に、雨にならぬうちに、里へ下らつしやれ。なう、わるいことはいはぬ。さうさつしやれ、さうさつしやれ。

老女

いや〜、おれは歸らぬ。どうしても此山の土になるのぢや。

青

其御決心でござりますれば、必ずお歸りとは申しませぬ。したが、此家では泊めぬと申す。お山へは登られず、雨は今にも降つて來さう。ま、ともかくも最前の村までお戻りなされませ。其上でならば、屈強の者を雇うて、お伴

爺

いたさすことも出来ませうす。ともかくも一先お歸りなされませ。

さうなされ、さうなされ。
老女らうぢよ尙なほかぶりを振りつゝ泣いてゐる。

やれ、憂いことやの、憂いことやの。

(物置もの置きから蓑笠みかさを取り出して来て) さう、これを被まてござらつしやれ。

(それを受取りて) かたじけない。いかい世話せわになりましたわい。

青 爺 婆

尙なほいろく、棄すてぜりふにて、三人さんにんかはるく、老女らうぢよを慰なぐさめる。老

女ぢよ餘儀あまなく、泣くく、起たち上ある。

さうらば。

婆爺

御無事ごみじでござらつしやれ!

主従しゅじゆう元の路みちへ歸り去る。爺婆ぢよばあ五六歩送おくつて行いつて、尙立なほたつて見送みおくつてゐる。

姉 妹 姉

と、そこへ娘むすめ二人ふたりおとさ! おかさ! と姿すがたを見せぬうちに嬉うれしげな聲こゑだけ先へ聞きかせて、ばらくと駈かけ戻もどつて来る。

お父とさ! お母かさ!

若行者わかぎやうしやさんが助たすかつたわいな。あ、嬉うれれしや〜!

此中このうちに、すぐ其後そのあとから、先刻せんこくの樵夫せうぶ牛鞆うしづりが先に立たち同じ仲間なかまの毛面けづらと赤脛あかすねが、雨戸あまどの上へ一人ひとりの若い男わかをとこを臥ねかして、吊臺つりだいを運はこぶやうにして運はこんで来る。やがて橋はしを渡わたつて、此方こつちまで来くると、

それ、そこから直床すくゆかへ上あるが可えい。…さうぢや〜。

一同手傳どうてつたつて、雨戸あまどの上うへの男をとこを篋かげひの此方こつちの框かまちから這はひ上あらせらる。若い男わかをとこ韓國かんこくの廣足ひろたるは、齡としは二十七八、久ひさしい荒行あらぎやうで、都人みやこびとの昔むかしの面影おもかげは無ない程ほどに、目めにも焼やけ、やつれ果はて、はゆるび、容姿かたちは優美いゆうびで、何なにさま貴紳ききんの果はかとも見みえる。白しろい行衣ぎやうえは、焚火たきびな

どて乾かしたらしく見えるが、處々おそろしく裂け破れてゐる。豊かな頭髮のまだ幾らか水に濡れてゐるのを、細繩で端を結んで背に垂れてゐる。

えいかな!

あぶないぞな。

かたじけなうござる。もう大丈夫でござる。もうようござる。

さア、こゝへ臥さつしやれ、臥さつしやれ。

いや、もう大丈夫でござる。かたじけなうござる。かたじけなうござる。

るろり 爐の傍に坐る。家の者は皆席に着き、樵夫三人は楯に腰を掛ける。

妹

なアお母さ、あのお人はなア、西谷をば覗かしやつて、それで怖い目に逢は

婆

つしやつたのぢやげな。

きつとそんな事であらうと思つた。(廣足に向ひて) 十五年前の話を知らつし

やらんでも無かつつらうに、ま、ひよんな事をさつしやつたなう。

(面目なげに) 自分ながらわるいことをしました。

爺は此間に何やら薬艸を湯に浸して持つて来る。

さ、良い薬ぢや。ま、これでも飲んで、氣を落附けさつしやれ。

わしらの心得になるこつちや、氣が落附いたら、詳しい話をして下され。

さうぢや、心得になるこつちや。噂にはたびく聞いてゐたが、どこいら邊

が魔所やら、おれにはまだ見當も附かぬ。

どうして覗く氣にならつしやつたのぢや? わしらでさへ知つてゐるお行

者さまのお禁斷所ぢやござらんかいの?

さア、つい五六日前までは、夢にもこんな氣はなかつたのぢや。師匠の行者

廣

婆

赤

牛

爺

廣

どのは、先々月陸奥へ往かれる前にも、取りわけて予に戒めおかれた。「おれが不在になると、あの西谷の方で山鳴がするかも知れん。併し、如何な事があつても、西谷へは入るな。萬止むを得んことがあつても、前鬼と後鬼とが歸るまでは俟て。」と斯う言ひおいて師匠は出て行かれた。で、わしは、無論それに背かうなぞとは思つてをらなんだのぢや。ところが、此五日このかた、あの山鳴が日増に激しうなるにつれて、わしが思うたには、如何に師匠の命令にもせよ、あのやうな不思議を正體も見届けんでおくといふは不覺ぢや。あゝして棄て、おいたら、如何いふ間違にならうも知れぬ。それに、前鬼や後鬼には、始終往來を許しておかつしやる。して見ると、わしをば修行のまだしい者と見貶してござらつしやるのに相違ない。くちをしいことぢや。遠國へござつた不在中の代役をする程の予に、それほどの事が出来んとはあさましい！ 村々の衆に聞かれても返答がならんやうでは面目な

い。日頃の修行は何の爲ぢや？ かういふ妖變を祈り伏せる爲ではないか？ 如何な難事でも、命懸けでするなれば、遂げられん筈はない、と思つて……

廣 婆

あゝ！ それでつい覗かつしやつたのぢやな？ 全く予の心得ちがひであつた。が、今の先までは、さうは思はず、けさの起きがけにも、其事をば考へ、いつもの通り、東の行場へ降りようとする、例の山鳴がいつもよりも激しう聞えて來たばかりでなく、氣の故か、獸の唸るやうな聲が聞えたので、どうしても心が抑へきれず、ついふらくとなつて、西へ西へと降りて行くと、空が急に曇つて來て、四下には深靄が降り、とんとまア歩きつゝ夢を見てゐるやうな心持。と、いつの間にやら、繁つた大きな木が蔽ひかぶさつてゐて、晝とは思へんやうな、昏い、物凄しい、深間へ出てゐた。はつと思ふと、すぐ目の前に、大きな、十抱もあらうといふ

上下八股の樟の木が横倒しのやうに生えてゐて、其股に何とも言へん怖しい——獸類だか、鬼だか、神だか分らん——者が横ねぢれに挟まつてゐて、のたうつては呻き、呻いてはのたうつ。のたうつ度に、木も岩も地震のやうに震動する。其呻く聲は冬の暴風のやう。……

と言ひかける途端に、又も不思議な山鳴が聞えて来る。

や！……

と廣足は話を中止する。一同の顔色が變る。やゝあつて廣足は話を續ける。

其怪物を一目見ると、忽ち慄然と掴み立てられるやうで、恥かしいことながら、日頃の修行も何もあつたものでなく、總身がわななくと震へ出し、舌はこはばる、目は眩む、頭が（と兩手で頭をおさへ）ぐらくと破れさうになつて、——さりとして手や脚は痲痺れてしまつて、どうすることも出来ん。そのう

ちに、其奴が予にむかうて、怖しいことを言ひかけをつた。初めはそれを、只もう怖しいとばかり思つて聽いてゐたが、其中に、どうしても斯うしても其奴の言ふ通りにせねばならんやうな氣持になり、つい半夢中で、取返しならん返辭をしたやうな氣もするので、さア怖しうなつて、死物狂ひで逃出さうとすると、其後ろから予の耳へ、其奴が三度浴びせかけをつた怖しい呪語！ あゝ、思ひ出して身が慄へる！ けれども此方も一生懸命、右とも左とも方角知らずに、岩をも木の根をも飛越え、跳越えて、何町ほど駈けたことやら！ 溪河の深みへ轉げ落ちて氣を失うたのも、自身では一切知らなんだのぢや。（身を慄はして）あんな怖しい目に逢うたことはない。

（同感して）あゝ！
（娘等を見返り）な、それが一言主さんぢやがな。（皆々にむかひ）いよくお縛が弛んだのぢや。けふからは油断がならんぞな。

爺

山鳴が次第に激しくなる。空が暗くなる。折々遠くて電光がする。娘らは老人の傍へ寄りこぞる。

三

(廣足に向ひて) では、何か其山の主さんと約束をさつしやつたのぢやない？

廣足 うつむいたまゝ黙つてゐる。爺は婆と顔を見合せる。

心得ちがひをさつしやるなや。主さんが如何にあばれ出いても、つまりは

行者さんには敵はん。行者さんの方が正道ちや程になう。

ま、それでも命を拾はしやつてよかつた。

ほんになア！

全く皆の衆のお底で命拾ひをしました。くれぐれもかたじけなうござつ

た。(空を見上げて) や、おそろしう空が暗うなつた。どれ、もうお暇をしませ

う。

廣 姉 婆

牛 廣 婆

お暇いうて何處へ往かつしやるのぢや？

山へ歸るのでござる。

めつさうな！ その弱つた體で、どうしてお山へ歸らるゝものかな。それ

にもうやがて午過ぢや。ま、飯でもくひなされ。

さうぢや〜。嘸ひもじからう。よばれさつしやるが可い。

さうぢや〜。折角ぢや、よばれさつしやるが可い。

いや〜、さうしてゐては、尙と師匠に濟まんによつて……

此中にさつと風す風と共に、雨が激しく降り出す。電光がして雷が鳴りはじめる。

爺 婆

や！ とう〜來たわい！

さ、濡れる〜。みんな此方へ入らつしやれ、入らつしやれ。……(廣足にこ

りや逆も歸らるゝこつちやござらぬぞな。……姉よ、それ〜降込む。その

三

雨戸を、それ、そこへ！ …… 背戸の方は可いかや？ 江布利は背戸を見て
来いやい！ …… さ、さ、みんな上らつしやれ、上らつしやれ。
雨風ますますはげしく、雷鳴ますます近くなる。

* * * * *

第二幕

第一場

大峰林中

向う一帯の蒼鬱たる密林。風雨。電光雷鳴。大陰曆九月十
一日頃の初夜前後。
右手(上手)から突然に、河童の腰に毛が生えたのかと思ふやう
な身長三尺ばかりの怪物と金太郎に翼が生えてゐるのかと
思ふやうな、肌の黄色い化物が、こけつ轉びつして駈け出して
来て、やがて右手(下手)へ逃げ込む。つゞいて同じく右手から
一個の大きな怪物が、左右の手で二疋の奇異な妖怪を引立て
「おどれ、うしやアがれ」と怒鳴りつゞけながら出て来る。

此の大きな怪物は、よく見ると、慥かに人間で、男性であるらしく、齡は五十以上、頭髮は赤黒く、まるで棕櫚の毛のやう。おそろしく、頬骨が立つて、眠の光が鋭く、乾固つたやうな醜怪な顔色だが、兇暴には見えない。すべて全然枯木のやうになつてゐるらしい。ほとんど裸體だが、粗布の犢鼻褌を締めて、腰のあたりは何か獸の皮らしいものを纏つて、背には岩疊な笈を負ひ、繩の帯には柄の長い古風な斧を挟んでゐる。これが、序幕で噂されてゐた役の行者の使はしめの前鬼なのである。引立てられてゐる妖怪は、いづれも身長は四尺位で、胴から上は、一疋は男、一疋は女、只の人間とさしたる相異もないやうに見えるが、よく見ると、男の方は面附がやゝ猿に近く、女は目の際だつて大きく、目と目の間が人間より隔だつてゐる。臍の邊から下は、二疋ともに明かに野獸である。蹄の形なぞから見ると、雌の方は鹿かとも思はれ、さうして色が飽迄も白い。



前鬼

おどれ、たつた二月の間ござらつしやらんばかりぢやのに、もう御禁制を破りをる。どうしてくれるか、見とれ、此極道めら！……

男女の妖怪は首れつこを

掴まれて、きやア〜叫びながら、頻りに手を合せて前鬼を拜む。

やい、行者さまがまだござらつしやらなんだ頃の、此山の事を忘れをつたか？ あの母子の魔神めらが、こゝいら中一圓を横領して、あばれ廻つてゐた頃には、やい、おどれらは如何な目に逢うてゐた？ 夜も晝も、——二六時中、年が年中、——あの母子に虐使はれて、只の半時も休むことが出来なだばかりでなく、それ、その身體中に、折檻の生創が絶えたことはなかつたぞよ。(妖怪共をこづき廻すと、二疋とも悲鳴をあげて又頻に拜む)。其怖ろしい苦みを誰れのお庇で助かつたと思ふ、此罰當りめ！ 行者さまの大恩を忘れをつたか、うぬ！……

手強く二疋を右と左へ突放すと、二疋とも一二間けしとんで平伏り、暗雲に米搗ばつたの眞似をしたり拜んだりしてゐる。

が、今夜は最う一遍だけ堪忍してくれ。又とこんな眞似をしくさると、何もかも行者さまに申しあげて、五十六億七千萬年の間決して解くことの出來んお呪縛を受けさせるから、然う思へ、ろくでなしめ！……失せう！

赦免が出たので、二疋の妖怪は、一さんに上手へ逃げて入る。電光も雷鳴も止み、雨も止んで、四方が寂となつた。前鬼は暫く其後影を覗んでゐたが

前鬼

お命令で、中を飛んで駈戻つて來て見ると、案の定、これぢや。魔神の葛城めが、お結界を破りをつて、いつの間にか入り込み、何か食はせをつたと見えて、一言主めはあばれはじめ、妖精共は怠ける、廣足めはあのさま。今夜にも魔神めが又來をるかも知れん。こりや大事になつて來たわい……(といひながら空を仰いで) やつと夕立が晴つたさうな……

此途端に、左手(下手)から、更に一個の怪物が飛び込んで來た。

大體に於て、前鬼に似てゐるが、これは明かに女性らしく、やゝ長い棕櫚の毛を根元で束れて、其末を結び垂れ、腰、股のあたりは前鬼同様だが、流石に粗布の袖なしやうのもので裸體を半掩うてをり、手には古風な大きな鐸を持つてゐる。前鬼は之を見返つて、

四六

お、後鬼か？ どうした？

後鬼

何もかも行者さまが言はつしやつた通りぢや。何様、あの廣足にや魔神めが魅入つたらしいぞや。あいつ、命を助かつて、あの一軒家へ泊り込みをつた其晩げから甚い熱病、やんがて其病氣は治つたなれど、それからといふもの、だんくと人柄が生れ變つた様になつて、今では西谷を覗いたのを悪い事をしたと悔むどころか、まるで新しい悟でも開いたかのやうに慢心し、毎日々々の界限の者を集めて、説教をするやら、萬病平癒の祈禱をするやら、



前鬼

ら。まぐれ當りであらう、二三遍験があつた。すると物知らず共が有難がり、とりわけ若い女子供は、あの生白い面に迷うて、やれ、役の行者様のお名代ちやの、活佛さまちやのと崇め立て大騒ぎをするので、あいつ彌々えい氣になり、行者さまを蔑如の増上慢。外道とはあのことぢや。あの儘にしておいたら、行者道のどんな迷惑にならうも知れん。早うどうかせにやなるまいぞよ。

(しきりに首肯いて聽いてゐたが) おれも今

四七

さう思うてゐたところぢや。……よもや今夜中に、西谷へ、魔神めが入り込
むやうなこともあるまい。おれは中を飛んで駆けていつて、此事を行者さ
まに知らせて來う程に、おのしは最う一遍麓へ下り、もつと様子を見届けて
來い。……

後鬼うなづきて、すぐに元來の方へ行きかける。

おれの不在の間、西谷口の警誠も油断すなよ。

左右へ別れ、急ぎ足で入ると、局面が一變する。

第二場

西谷の魔所

大峰の一部、今の西の視附近の深谷でもあらう。但し地勢は
後に大變化があつたため、著しく後世のとは異つてゐる。

第一場と同日の夜半。
谷底から見上げると、右手も左手も削つたやうな千仞の絶壁
である。右手の手前などは、其絶壁の頂きに樹木が繁茂して
ゐるため、實際空を遮つてしまつて、高さの知れぬ六枚折を不
揃に開きかけて立てたやうに、其巉々たる岩角が出つ入りつ
重なりあひ、聳え立つてゐる。ずつと離れた左手の絶壁の一
部(即ち下手の前)は、餘り久しからぬ以前に激しい山崩れがあ
つたらしく、あちこちに大小の岩石が、樹木を壓折つて轉げ落
ちたまふ、重なりあつて、斜地を形成つてゐる。此斜地の頂き
から深へ臨んで、掩ひ掛かるやうになつてゐる樟の大木、幹は
根元では十抱もあらう、それが根から二尺ばかり上で四股に
なつてをり、更に三四尺上の處で又四股に分れて、東西南北へ
會釋もなく、其長い、逞しい大枝を張出して、其一枝一枝がまた

幾條にも分れ、て當面の溪の上殆ど一ぱいに掩ひかぶさつてゐる。それから其手前や背後にも霜にはまだ間のある時候だけに種々の木草が尙繁つてゐて曇天や雨天には晝間でさへ夜のやうに暗い。まして眞夜中の陰森さと言つたら無い。それが月夜だと崇高の氣が加はつて一段と物凄しい。此崩れた断崖の彼方大樟の幹の背後に當る處に溪へ覗き込んでゐるやうな岩山が突出してゐて其裾は中へ割つたやうな懸崖を成してゐるが其岩山の邊に一道の山蹊が通じてゐるらしく其頂きから右手の奥の同じく溪の上へ突き出てゐる一大懸崖の頂きへ掛けて天然自然の苔蒸した岩の橋が出来てゐる。此橋の左の袂は大樟の梢や其他の樹木に遮られてよくは見えない。前に言つた左手の覗き込んだやうな岩山の附近は杉や檜の

老木が蓋々と並び立つて空を摩してゐるが其木の間越しに此岩山に連互してゐる同形式の岩山が一段高く一段物すごく聳えてゐるのが見える。其断崖の裾を巡つて一道の溪流が白練を躍らすやうに不規則にちらばつてゐる怪岩奇石の間を縫つてうねり、緩くなつたり急になつたり細くなつたり太くなつたりして六枚折に比した右手の絶壁に添うて流れて来て遂に右手々前の崖下へ流れ入つてしまふ。此日は宵に夕立があつたので雨雲の餘波が尙だらしなく迷つてゐて青空はほんの其破間々々に覗いてゐるぐらゐ。遠くて草臥れたやうに稲光りがする。と稍暫らくして思ひ出したやうに居眠りしながら廻してゐる石臼のやうな雷が聞える。樹梢からは雨の雫がまだぼた／＼と落ちてゐる。樟の大枝の間からは十一日頃の落ちかたの月が餘程前か

ら居残りの雨雲と煮切らぬ生存競争をしてゐたが——此の時
やつと顔を出した。どこでか不思議な鳥の聲がする、それは
妖怪國の笛の音ではないかと思ふほど、聞きやうによつては
凄いとふよりも好笑しいとも感ぜられる一種奇妙な拍子
を取つて啼くのである。

夜は次第に更ける。風はまるつきり死んでしまつた。谷中
が閑寂としてゐる。

と、溪の奥、斜地の彼方、大樟の背後に當つて、人間界では誰も聞
いたことの有りさうにない奇異な、多勢の笑ひ聲が聞えた
思ふと、斜地の裾を廻り、伸し下つてゐる大樟の枝下を潜つて
ばら／＼ばら／＼と、其同じ奇異な聲で笑ひさゞめきながら
手と手とを繋ぎあつて駈け出して來たものがある。見ると
何れも奇怪不思議な鳥に似て鳥でなく、獸に似て獸でなく、無

論人間とは思はれない、裸體の妖怪なのである。その中には
前の場の四頭も加はつてゐるが、別に三尺に足らぬ白髮頭の
怪物と黒い長髪を背に垂れた女の化物とがある。白頭の怪
物は恐しく頭が大きく、鼻は僧正坊の如く、總てが老人のやう
で、身長は二尺ばかり、長い鼠のやうな尻尾を垂れて、よち／＼
してゐる。それから女怪は肩から腰へかけて、一ばいに雉そ
つくりの羽毛が生えてをり、翼や尻尾はないが、脛や足は全く
の鳥の相貌は存外に醜怪でない。皆如何にも嬉しさうである。
總體で六頭。浮れ出すと、僧正坊以外は、どれも鼯鼠のやうに
矯捷に跳廻り飛廻るので、時としては目にもとまらぬ。
此妖怪群は、手に手を取つて、奇怪な笑ひ聲を發して、嬉しげに
駈出して來たが、やがて人間のよりは禽獸のに近い音節で口
をきゝ出した。白髮頭の僧正坊だけは口をきかない。さて

手を繋ぎ合せて、緩く輪形に廻りながら、調子づいた聲で、

妖の一 はつてつた！

妖の二 はつてつた！

妖の三 はつてつた！

妖の四 はつてつた！

妖の五 はつてつた！

妖の一 ぴいかぴいか、はつてつた！

妖の二 があらがあら、はつてつた！

妖の三 びつしよびつしよ、はつてつた！

妖の四 ぴいかぴいか、はつてつた！

妖の五 があらがあら、はつてつた！

一同 (聲を揃へて) ぴいしよびいしよ、はつてつた！ はつてつた！ はつてつた！

不思議な拍子を取つて啼く先刻の鳥が、此間一寸鳴き止んで
ぬたが、又顔に鳴きはじめた。妖怪共は、待つてぬましたとい
ふ風に、滑稽な拍子に合せて、一種奇妙な輪形舞踏を、天井のや
うに伸しかゝつてゐる樟の大枝の下ではじめた。おまけに
妙な節で歌めいたものを囃りはじめた。雲がやつと散じた
ので、月の光が冴えて来た。

のうこんだ、くうろんも！

ちんれんれ、ちれる！

あつぱつぱ、きらら！

あつぱつぱ、きらら！

きらら！

手を繋ぎ合せて、脚で拍子を取つて踊り跳るのだが、歌が切れる
と怖しく早足に廻りはじめた

一同

(同音に)

ぐるくせつこう！

雲

走り止ると、又同じ歌を囀りはじめぬ。此輪形をどりが三度ばかり濟んだ途端に、全く出しぬけに、大樟の幹の近くで、一聲高く——手負虎なぞの吼えるやうな聲で——物凄く呻き聲がすると同時に、殆ど溪一べいの大樟がゆさゆさ——がさ——と揺れはじめ、續いて同じ呻き聲が第二聲、第三聲、第四聲と次第に高く、次第に物すごく連續して、其たびに大樟の枝は勿論其邊の樹木、岩岩までが動揺するので、自然とそれが界限の山嶽にも影響して、大げさに言ふと、山鳴り谷應へ、小さい地震のやう。これが爲に散際になつてゐる病葉や枯枝はいふまでもなく常磐木の葉さへも堪りかねて、小雨のやうに、ばらばらと散りかゝる。軌轢つて折れるので、小枝ぐるみ落ちるものもある。最も激しくゆれてゐる正面の樟の一枝が、急にめり——と音

がして幹の接續際から壓折れると共に、呻り聲の本體が露骨になつた。大樟の第二の四肢が、其最中で眞二つに裂かれてあつて、其間に、横捻れに身長八九尺もあらうといふ一個の怪物が、無論裸體で、挟まれてゐるのである。面は——長い赭黒い頭髪を獅子の鬣のやうに振亂し、それが鼻といはず、目といはず亂れかゝつてゐるので——よくは見えぬが、何でも怖しく醜怪な、併しなびら偉大と感ぜられる類ひの相貌であるらしい。太い、藤の幹のやうな右の腕では、つい今壓折つた一枝の直傍の大枝を引抱へ、尙其面上の大枝を掴まうとするかの如くに、顔に右の手を働かしてゐる。胴は幹に挟まれて見えぬ。上半身は人間と異なつてゐるとも見えぬが、銀色の蹄を月の光りに反射させて、四下の小枝を蹴散らしてゐる太い毛むくじやらの其片脚は、野牛か野猪かの脚に似てゐる。これは三

十年前までは此界隈の主であつた一言主といふ獣神なのである。

最初は只呻くのかと思つたのが、次第に意味を傳へる音節となつて来る。はじめに呻り聲が一聲聞えた時に、踊り廻つてゐた妖怪共は、猫の一聲に活動を中止する鼠のやうに愕いてびたりと立どまつたが、二聲目を聞くや否や、一齊にけたまふしい叫び聲を發して急ちばらくと四方へ逃げ散つた。獸に似たやゝ大きな二頭だけは、大枝が折れて落ちた時までも遠くへは逃げようともせず、頭を抱へて、手近の岩かげに蹲居つてゐる。

一言主 うゝん！ うゝん！……阿母よう！ 阿母よう！ 歸つて來う！ 歸つて來う！ 速う……うゝん！ うゝん！

妖の一 いひゝゝゝひ！
踏居つてゐた妖怪が岩かげから這出して來て貌を見合せ首をすくめ肩をそびやかしてゐたが、急に前へ飛出して來た。

妖の二 いひゝゝゝひ！

妖の一 ほッえれえい！ ほッえれえい！ いひゝゝゝひ！ 意ッ地なし！ ざッまア見れ！ いひゝゝゝひ！

妖の二 ほッえれえい！ ほッえれえい！ いひゝゝゝひ！ 力なッしい！ ざッまア見れ！ いひゝゝゝひ！

一言主の扱まれてゐる直下を、齒をむき出して見上げながら走り廻る。それを見おろして、睨みつけて

一言主 やかましいわい！……

雷霆の如く一喝すると、妖怪は吹き飛ばされたやうに一間ほ

どもけし飛んだが、次の長い呪ひの間に、又そろく這出して来る。前に逃去つた他の妖怪らも、幾ら叱られても平氣な頑童といふ見えて、あちこちの岩かけ又は叢から首を出させ、齒をむき出し、折々奇異な叫び聲を發して、兄分の妖怪に聲援をするが、やかましいいわい！の一喝に會ふといふと、急にまた姿を没する。

うち蟲めら！ 新入のうぬらまでが見下げやがつて、おれを病みほうけた獅子か虎のやうに扱やがる。今に見ろ、自在力を恢復しやア思ひ知らしてくれるぞ！ 三十年前なら、うぬらが覗くことも出來ん山だぞ、此處は！：
：うゝん！ うゝん！……行者が何だ、行者が？ たかゝ老いさらばつた人間だ。其老耄に縛られた此態は何だ？ 此さまは！ あゝ、此五體に充ち満ちて、はちきれんやうになつてゐた強い力は何處へ去つた？ おれ

の若い強い力は？ どんな岩山の肋骨でも、肩骨でも、おれがうんと息張つて踏む力足には、おつびしげて、みじやけて、菌の笠のやうにおつびらいたものだ！……あゝ、あの彌が上に生ひ茂り生ひ延びる草や木の若い夏は何處へ去つた？ あゝ、若い臭ひで噎返る青葉の夏——あゝ、強い、逞しい、生じた、燃熾る夏は何處へ去つた？ 雷はおのしのをめく聲だ。稻妻はおのしの眼の光だ。おのしは岩石をも煮爛らし、大地をも焼割る。おのしは永劫の熱、永劫の力、永劫の若さだ。それがおのしだ。おのしはおれた。あゝ、其若い、逞しい、あぶらぎつた夏は、もう去つちまつたか！ あれから最早三十度目の夏が去つちまつた！……うゝん！ うゝん！……うんにやうんにやゝゝ、おれは今でも夏だ、今でも夏だ。それなのに、それなのに、たかゝ老耄の人間めが、忌しい符呪を工夫しやアがつて、おれの此強い力を縛り、おれの此若い命を壓殺いて、晝三度、夜三度の猛獸の生膽をさへ食は

せやがらん！ 何故おれを苦めやがるんだ？ 何故おれを？……うん！
うん！……おれが如何いふ悪い事をした？ おれに土鼠にも劣つたあさ
ましい仕事を吩咐けやがつた。それをせなんだのが、何がわるい？ おれ
が何をした？ 何がわるい？

妖怪共がまた枝の下を走り廻る。

妖の一 飲んむなッてッた獸類の生血飲んだわ！ ひっ、ひっ、ひ！

妖の二 食ふなッてッた獸類の汚穢ッ物食つたわ！ いひっ、ひっ、ひ！

妖の一 阿母を牝にしてまッくばつたわ！ いっ、ひっ、ひ！

群妖 二齊にまッくばつた!! まッくばつた!! まッくばつた!! いひっ、ひ!!

一言王 やかましわい!!

妖怪共又飛び退く。或者は叢へ逃込む。

食はんでをられるか？ 飲まんでをられるか？ まくばつたが、何がわる

い？ それは獸神の持前だ、堪へられんことだ、せにやならんことだ……
うん！……うん！……飲むと食ふとは命を燃す薪だ！ まくばへばこ
そ俺が二倍にもなる。大きくなる。高うもなる。十倍にもなる、百倍に
もなる。千萬倍にもなる！ うん！ 阿母とまくばつたが何がわるい？
阿母と妻とを別にするのは人間の猿智慧だ。おれは神だ。神仲間には牝
牡はあるが、阿母も妻も姉も妹もない。主もない、家來もない。きのふの
他の物が、けふはおれの物だ。たれかれの差別は無い。無いのが自然だ。
それが天然の掟たわい、蛆蟲めら！ うぬらは精靈に生れやがつた癖に、意
氣地もなく行者めに虐使はれて、前鬼や後鬼にすら虐使はれて、食ひたい肉
も能う食はんで、枯蕨のやうにしなびやがつて、時々の盗みまくばひで、辛
と乾枯びた子種を蒔く。意氣地なしめ！ 木や草に墮ちちまへ。石や土
になッちまへ、うぢ蟲めら！ かりにも神にならうとするなら、おれを傲ろ

おれを、うち蟲めら!

妖の一

力なッしい! 意ッ地なし! それッほどえッばるおんのしが、あんでんに負ッけた人間に? あんでんに負ッけた人間に?

妖の二

さやア! さやア! あんでんに負ッけた?

群妖

(二齊に) さやア!! さやア!! あんでんに? あんでんに? いひゝゝゝひ!!

一言王

やかましいわい!!

と叱咤つたが、覺えず火でも吐き出すのかと思ふやうな苦しげな大息をついで

おれは生り出でん前の定命で、晝三度、夜三度、猛獸の生膽を食つた上に、年に二度三度、月の輪が圓うなりはじめて全圓になるまでの中一句の間に必ず一度彼の猛獸の、七つ子の、其中央の牡の子を、孕子のうちに生きながら

取出いて生血を吸はねば、生得の通力が枯れてしまふのだ。……うゝん!

……それを見抜きやがつたあの老耄め、此山へ移る前に、先づ四方七十里の間を、行力で結界し、剩へおれには大切な彼の猛獸を海の彼方へ逐拂やがつたので、おれの通力の根が凍えて、抵抗ふことが出来なんだのわい!……うゝん!……阿母の葛城も危かつたのを、業通で辛と逃れて、行者めが此山を離れる時があると、前鬼や後鬼の目を盗んで、七十里の彼方から、時々猛獸の生膽を持って来てくれる。餌食さへあれば、元氣が十倍する。けふこれだけの力が出るのは此間の阿母の賜だ!……あゝ! 飲みたい、飲みたい、あの獸の七つ子の牡の生血が! 中の孕子の生血が! もう十五年の間飲まん! 阿母の業通でも海の彼方から、彼の得がたい七つ子の中央の孕子を、生しては持つて能う来ん。……あゝ、おれの力は、もう枯れ萎れてしまつた! もう此一枝さへ壓折ることが出来んか! うゝん! うゝん!

樟の一枝に手を掛けて壓折らうとして搖撼るが、中々折れさうにもないので、頻に呻く。

六

妖の一 自儘爲イッた罰ぢだ。まがもんめ！ とつとつわッびッれい、とつとつ！ 行者に！ とつとつ！

妖の二 さやア！ さやア！ わッびッれい！ わッびッれい！ とつとつ！

群妖 (一齊に) さやア!! さやア!! わッびッれい!! わッびッれい!!

一言主 人間なんぞにわびるものかい！ どんな苛責をしやアがらうと、晝千度、夜千度、おれの此五臟六腑を熱鐵の嘴を有つた鷲や角鷹に啄かせやがらうと、おれの骨々節々を、一つ一つに截割つて、晝千度、夜千度、永劫に冷めん煮鉛を注ぎ込みやがらうと、何の人間なんぞに詫びるものかい！ 今に見やがれ、あの老耄！ おれが今に、あの孕子の生血をば飲むが最後、おのれ、八裂にしてくれるわ！

枝を掴んでぬる手に満身の力を籠めると、それがびしくと音を立て、折れかける。妖怪共は、一齊に頭を抱へて逃出す。途端に一言主は辛うじて折取つた一枝を横抛に抛げおろす。又も木の葉の雨。妖怪共はわつといつて、左右前後へ逃込む。暫くは山鳴が止まない。

一言主 うゝん！ うゝん！

此必死の努力の爲に、流石の獸神も、精力が全く盡きたと見えて、頽然と疲れ弱つて、手も脚も死人のやうにだらりとなり、今は唯方無げに呻くばかり、其聲さへも段々に弱つて行く。月がいつの間にかすつと異つた方角で照つてゐる。拍子を取つて啼く怪禽の聲は全く聞えなくなつた。と、向うの岩橋の右の袂へ、突然一の怪しい黒い影が躍り出た。遠くからは二尺ほどに見えるから猿かとも思ふが、人ら

空

しくもある——長い——頭髮をおどると振盪した——裸形の怪物、右の手に何物かを提げて橋上に突立ち、暫く此方を窺つてゐたが、忽ち左手の岩山へと飛ぶが如くに横切つた。と、一陣の怪風が満山の樹梢に渡つて、又一しきり山鳴がすると同時に、左手の斜地の上大樟の根がたの處へ突如として一の妖怪が現れた。面も、太い、逞しい腕も、大きなはちきれさうな、引締つた乳房を突出させた胸元も、悉く黄ばみを帯んだ——此時は月に照らされて蒼白く見える——裸體の、但し胴から下は全然、赭熊のやうな黒赤い、粗い毛で包まれ、其太い、逞しい、兩脚までが全く熊としか思はれんやうな一妖怪、赭黒い丈程の頭髮を地に引摺る位に振盪してゐる。慥かに女性である。眼はすさまじく大きく、口も若し一ぱいに開いたなら耳元近くまでも達かうといふ、併ししながら強ち醜怪とばかりは評しにく

突

い、何處となく一種崇嚴な聯想をも起させる一妖怪。右の手に人は人間のか獸のか不分明の、生れたばかりの赤兒らしいもの、頸すぢを掴んで提げてゐる。

女怪

かはい、／＼あが子のあが夫よう！ 嗚な待ツつらうなア！ 今宵こそ、今宵こそ、持つて來たわ。これ、こゝへ持つて來たぞよ。さ、速う飲め、此生血を。速う啜れ、此生血を。

と言つても、獸神は唯力無げに呻くのみである。 どうした？ どうした？ ……

女怪は、顔に氣を揉むらしく、つる／＼と樟の幹を傳つて一言、主の挾まれてゐる四股まで攀登つて、仰向になつてゐる獸神の上へ、掩ひかぶさるやうにして

これやい、どうしたんなア！ どうしたんなア！ あが夫のあが子よう！ 一か

究

はい、く、あが子よう！ 孕子を持つて来たぞよ。さ、これを啜れ、此生血を。おのしが助けたいばかりに、海を渡り、山を越え、西へ百里、北へ百里、往きつ復りつ六百里の其間を、おれは飛ぶがやうに駆け廻つて、搜いて、搜いて、く、やうやつと手に入れたコレ此例の獸の七つ子の中の孕子。此血を啜りさへすれば、おのしは直に元通りになる。神通力が恢復される。さ、速う、さ。

一言

うゝん！ うゝん！ 速う飲ませてくれい！ 速う！

女怪は孕子の胸を左の手で掴んで、更に右の手を其上に加へ獸神の仰向いた口の上へ臨ませて力を籠めて一つ絞ると、下では大きく口を開く。生血が其中へ注ぎ込まれる。と、如何したか、獸神は忽ち噎返りのたうち、虚空を掴み、呻きをめき、大苦悶を始めたので、女怪は身も世もあられぬといふ風に、狼狽

女怪

おほ、く、く、ほ！ おほ、く、く、ほ！ どうした！ どうした！ し、持つてゐる孕子を放棄し、哭きわめきつゝ、介抱する。

一言

うゝん！ うゝん！ ……今飲まいたのは——うゝん！——生血ではない！ 死んだ血だ！ 腐つた血だ！ ……うゝん！ ……毒がある！ 毒がある！ 臓腑が煮える！ 腸が燃える！ 骨々が割れひしげる！ ……うゝん！ うゝん！

女怪

えッ！ 生血でない!! 腐つてゐる! ……

女怪は身を蹴して四股から飛び下つた。落ちてゐる孕子を拾ひ上げて、きつと月光に透して見た。ち失望と憤怒と悔恨とに堪へかねたらしく、切齒をして孕子をはたと抛棄て、五つ六つ地輔を踏んで

無念や！ 無念や！ 無念や！ 無念や！ こよひこそはと、此長い頭髮

で、幾重にもく、掩うて庇うて、庇うて掩うて、掩うて庇うて來たんぢやけ

れども、一夜は潮風に吹き曝し、二日二晩は山霧野風に曝いたので、大事の

大事の七つ子の中の孕子が、絶入つてしまつたか！ 死んでしまつたか！

腐つてしまつたか！ 通力を恢復することが出來ん計りか、腐つた血がおの

しの臟腑へ沁み入つて、おそろしい毒となつたか！ 殺しもせず生かしも

せん煮鉛のやうな毒となつたか！ おほ、おほ、おほ！ 悲しや！ 悲しや！

おほ、おほ、おほ！

又も樟の幹の上へ猿のやうに身を懸して跳登つて、苦しみ跳

く獸神を介抱し煩擧をするやら、接吻をするやら。

おれが今吹込む此の息で、もとのやうになつてくれ！……強うなつてく

れ！……強う！ 強う！……

をめき叫ぶ聲が次第に嗚咽と衰へて行く。其悲しげな號泣
に山も谷も森も流れも反響して、何とも言へない凄じい寂しい
山鳴がする。木の葉の雨が又降りかゝる。地平線から又黒
い雲が沸き出して來て、いつの間にか岩橋の遙か下に落ち
かゝつてゐる月影が昏くなる。

物を言へい！ 物を！ おほ、おほ、おほ！ おほ、おほ、おほ！

此の時獸神は、力なく垂下げてゐた手足を、又少しく働かせ
て呻き出した。

一言主 うん！ うん！ あ、あれから夏はもう三十たびも去つたり來りし
たのに、おれの此身體は自由にならん！ 此苦しきは止まん！……もう何
十たび、何百たび、斯うして夏が去つたり來りするか分らん！ いつそ此息
の根が止つてほしいわい！ いつそ此の息の根が！……何故おれは死なれ

ん！ 何故死なれん！ うん！…あゝ、人間が羨しいわい、人間が！
人間には何一つの長所もないが、われとわが手で死なれるのが羨しいわ
い！ 死なうとしても死なれんやうに生り出でた神の身が怨めしいわい！
命を絶つことの出来ん生を享けたのが怨めしいわい！…どうしたら故の身
に戻られるか？ 何時になりや此苦しみがなくなるか？ あゝ、せめては
自由であつた過去を思ひ出さずゐたいわい！ 思ひ出す力が怨めしいわ
い！…うん！ 臟腑が煮える！ 腸が燃える！ 骨々が割れひしげ
る！…うん！…自由になりたい！…自由がほしい！…阿母よう
どうかしてくれい！ 助けてくれい！ 阿母よう！…うん！ うん！

又も聲が次第に弱つて行く。

女怪は狂氣のやうになつて、又も斜地へ駈下つた再び溪の上へ

へ躍りおりた。さうして身もだえして走り廻り、先刻抛棄て
た孕子を拾ひ上げて、又も月光に翳して見たが、悔しげに切齒
し、身をふるはせ、それを右の手に掴んだまゝ、遙かに岩橋の左
の岩山を睨み上げて、空洞な物凄い聲で咀ひはじめた。月は
何時の間にか落ちてしまつた。だしぬけに電光が閃く。暫
くして雷が鳴る。

女怪

おれの通力で、絞り寄せられる此山、彼山の土の毒、沼の毒、木の毒、水の毒、
彼奴めに、あの行者めに取著いてくれ！ 業が盡て死にかゝつて、とぐろを
巻いたまゝで腐つて行く蟒蛇の毒、蝮の毒、蝦蟇の毒、ありとある疫の毒、只
た一滴し沁み込めば肺の臓をも心の臓をも腸をも腐らせ爛らせる毒の液、
あの行者めが一つぐの毛穴から五臟六腑に沁み入つてくれい！ 骨を割
いて髓を抉つて、彼奴の壽命の續く限り、晝千度、夜千度、死なせもせず、生

かしもせんで、渦を巻くやうにのたうたせてくれい！ 苦ませてくれい！

憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！ 憎や！

大天井、小天井、此界限の峯といふ峯、谷といふ谷、森といふ森、河といふ河、

泉といふ泉に住む精霊共に、神代このかた總主と崇められて、日本八百萬神

の随一と拜まれてゐた母子ぢやのに、それぢやのに、あんな老老の人間めに

呪縛はれて、一言主呻き苦しむ あのざまは何ぢや！ あのざまは？！ 神と

生り出でたおれが、人間に敵たふことが何故出来んか？！ 何故出来んか？！

女怪は苦しげに一聲叫んで、抛出すやうに臥し倒れ、地を掻き

むしりく、石といはず、土といはず、掴んで抛げ、掴んで抛

げ、轉げ廻つて悶え歎いてゐたが、又すつくと立上つた。

お、おろかや！ おろかや！ おろかや！ 迷うてゐた！ 迷うてゐた！

…此世界に生きとし生ける者で、うぬが身を大切にせない者があるか？

わが命より他の命を大切に思ふ者があるか？ いやくくく、生きる力の

有る限りは、おのれを立て、おのれを張るのが自然の定めぢや。何ぢや？

おのれを捨てて他を救へ。…おのが片腿を切殺いで他の飢を救うてやれ？

え、それが直しいことぢや…え、それが正しいことぢや？ せにやならん

ことぢや？…あの老老の行者めが衆生濟度といふことを口實にしをるの

に釣込まれて、おれも同じに、此下界の皮膚に生いた蟲けらの人間めらを利

益するのを、此上もない事と思つてゐた…お、だまされたわ？ だまさ

れたわ？ 何のく、それがせにやならぬこと？ みんな臆病な人間めが、

強い者を防ぐ爲、おのが身を庇ふために、猿智慧で工夫し出した自儘の掟ぢ

や。お、だまされたわ？ だまされたわ？ おろかにも、善い神、正しい

神、直しい神と、取るにも足らん人間に拜まれたといふ未練氣があつたり

やこそ、憎いくと思つても、思ひ切つたことを能うせなんだ。悔しいと思

うても卑怯いことや残酷いことを能うせなんだ。……お、おろかや！
 おろかや！ 迷うてゐた！ 迷うてゐた！……善や慈悲は、自分の都合で
 人間めが築きをつた狭い、脆い、棧橋ぢやに！ 廣大無邊な、暗の夜
 の沙漠のやうな魔界には、道もない、涯もない。あ、何故おれは魔王にな
 らうとは思はなんだぞ？ 天上天下、我以上には何物も無い魔王になるな
 ら……

怖しい表情をして岩山の方を睨みつめた。一言主がまた苦
 しげに呻く。

あの行者めが生きてをる間は、人間めが我意を振ひをる間は、かはいゝゝ
 我子のあが夫が、あのやうな苦しみをやる！ おゝ！ あのやうな苦し
 みをやる！！ (又覺えず泣倒れんとしたむ、忽ち奮然として躍上つて) むゝ！ 今から直に
 越の地獄谷の火焰の泉に身を浸いて——煮返り沸返り七色に燃える火焰の

淵に——けふから七七日の間、夜千度、晝千度、身を黒焦にくすぶらいて、生
 身のまゝに死返り死返つて、神變自在の魔王とならう！ むゝ！ まづあ
 いつらを血祭にして人間の子種を絶つてくれう！

だしぬけに電光が閃く。一言主また呻く。女怪は覺えず其
 方へ駈行かうとしたが、先刻抛出した孕子を蹴付け、立ちどま
 り、きつと見て拾ひ上げる。又電光、女怪は無念げに孕子を
 見つめてゐたが、左右の手で其兩脚を掴み、さつと引裂く。
 血が滴る。又電光、一言主また呻く。暫くして雷鳴がする。

第三幕

第一場

大峯の山中

こゝは山上が嶽に近い大峯の山中なので、向う一面は山に間近な山林。こゝに樵夫牛鞠と赤脛とが斧を持ち、山仕事の合間らしく、岩角に腰を下して休息してゐる。時は陰曆の十月下旬である。

牛鞠

ほんまに、あらたかなもんぢやなう、あれほどの山鳴が、全然嘘のやうに鎮まつてしまつたわい。

赤脛

魔でも何でも、行者さまのお行力にや敵やせんわい。早いもんぢや、お歸

牛

りなされてから、もうかれこれ二十日ぐらゐになるのう。

さうぢや。けふでちやうど三七日ぢや。行者さまは、つい彼日から、あの

絶巔の岩穴の中で、お行をしてござるんぢやげな。

赤

それにお使はしめの前鬼さんや後鬼さんも歸らしやつたといふから、もうこれからは安心ぢや。鬼に鐵棒ではなうて、活神さまに鬼ぢや。

牛

同じお弟子でものう、あの生行者のやうな奴もあるから、油斷がならんわ

赤

廣足の和郎か？（牛鞠うなづく）。あの生白い面附が、初手から氣にくはんか

つたが、案の定、とう／＼あの一軒家の姉娘をまじくないをつたといふわ

牛

いま／＼しい和郎ぢや！ 何にせい、一寸見たところが佛々してゐるによつて、十人が九人までは瞞着られるわい。あの畦主のお嬢も嘗められたと



赤 武 赤牛 武 赤牛

さやうにござります。
 最前さいぜんから汝きまらの行方ゆくへを尋ねてをつ
 た。役えんの行者ぎやうじやが行ぎやうをいたしてをると
 か申まをす山上さんじやうの窟いはやへ案内あんないをせい。
 へい〜。
 とは言いつたが、もち〜して
 ぬる。
 早くはやいたせ。
 (おそろ〜) 恐れおそながら、命令おほせつけではござ
 りますが、行者ぎやうじやさまのお行場ぎやうばへは、出入しゆつにふ
 は御禁断ごきんたんでござりまするによつて……
 へい〜、並なみの者ものは参まゐられませぬ

赤 牛 武官 赤牛 武官

いふが定ぢやうかや?
 かも知れん。あんまり評判ひやうはんがわるいので、彼奴あいつも尻しりこそばゆなつたと見え
 て、今朝けさがた急きよにお山やまへ歸かへりをつたげな。活神いきがみの行者ぎやうじやさまぢや、よもやあ
 ないな奴やつ、お弟子でしにしておかつしやらう筈はずはない。やんがて又また麓ふもとへ追おひお
 ろされて來きやがらう。したら思おもふさま叩たたきこらいてくれう。
 それがえい、それがえい。つい長休ながやすみしてしまつた。お互たがひに倍増ばいぜいの勉強かせぎを
 せにや、此間このあひたぢやう中の埋合うめあはせがつかんわい。さア、出掛でかけうかい。
 二人ふたりが立上たちあがる途端とたんに、下手しもてから都みやこの武官ぶくわん、從卒そつすう數名すうめいを引連ひきつれて
 出でて來くる。其時代そのじたいの警官けいくわんなのである。
 まて〜。
 へい〜。
 汝きまらは洞川どうかほ村むらの樵夫せうふか?

黙れ！…並の者は参られんでも、予は、恐れ多くも、飛鳥の朝廷の勅命を拜承つて、妖僧役の行者を召捕の爲に相向つた討手の頭人ぢや！

ひえ、！
 役の小角師弟、多年邪法を修し、頻に愚民を誑惑し、財物を貪り取る由、豫てより朝廷に相聞えをつたが、近年に及び、彼れ悪心増長なし、日本國を魔界となさん手始めに、恐れ多くも、帝を調伏し奉るといふ事、訴人の者目を追うて頻なれば、勅命を拜承り、實否を相糺しに参つたのぢや。彼奴邪法を自在にし、妖魔鬼神をも驅使ふとか申せども、何程の事があらう？ 普天の下率土の濱、王土にあらざる處なければ、萬が一にも取逃さぬ。已に八方に組子を配置り、通路は悉く斷切つたわい。…速かに案内せい。
 へい〜。

武官は樵夫二人に案内させて上手へ通り抜ける。

第二場

山上ヶ嶽の岩窟

見下すと、忽ち目くるめきさうな、何百丈とも深さの知れぬ深い壑に向つて、天然自然の半懸空式(柱なし崖造り)の城郭ともいふべき如くに、今にも落掛かりさうに、岬々たる岩山の一部分が、ぬつと突出てゐる。處は山上ヶ嶽の一角。見渡す右と左には、目近く萬仞の絶壁が、崔嵬として天空に沖つて聳え立ち、正面のやゝ上手寄りには、極めて奇怪な形状の滅法巨大な殆ど小山ともいふべき大岩が、所謂崖造り柱無の城郭の天守臺ともいふべき見得で、是れまた今にも倒れかゝるかと思はれる格好をして、断崖に臨んで嶄然と屹立してゐる。さて、其大岩の裾は、突兀嶙峋と、不規則ないかつい波形を成して、手前の方舞

六
臺の前面へと蟠蜿し、其一部は、六疊敷程の窟を形成つてゐる。
窟の上手寄には、一旦登つて又向うへ降るやうになつてゐる。
半ば天然、半ば人工の加はつた石磴があり、又大岩の向うの裾
に沿うて左手(下手)へは、天然の岩の胸壁や岩の櫓が更に突元
と並び聳えて、其胸壁の盡くる處に、何百年間風雪に窘られて
ちやこまりひねくれた背の低い老松が高く低く二本深谷に
向つて生えてゐて、其のすぐ手前に麓への通路がある。それ
は、見るから如何にも嶮岨さうな危なさうな降口で、松の根が
たに太い藤かづらが結び附けてある。これは昇り降りの便
宜にとて、人が加工したものらしい。一體に樹木は甚だ少な
い。ひねくれた背低の老松と少しばかりの灌木があちこち
に生えてゐるばかりである。
窟は其地盤が平地よりはやゝ高く、總高さ一丈位、入口の高さ

は、やつと五尺ぐらゐ、間口は不規則にだらしなく擴つてゐて
二間餘り、奥行は一間半ぐらゐ。奥へ入ると天井が低くなつ
てゐる。
千仞の斷崖の彼方、溪谷を隔てた真正面には、大天井、小天井の
二峯がによつきりと屹立し、尙其左手には、他のやゝ遠い山々
が見えてゐる。窟の内部、やゝ奥に、淨衣を被て、角帽子をいた
だき、手に金剛杵を握つて、殆ど石の像かと思ふほどに、寂然と
瞑目して、結跏趺坐してゐるのは、役の行者である。齡は六十
位だが、頭巾の底から見える頭髮や長々と延びてゐる鬚髯は
雪のやうに白い。が、身心共に剛健であるらしく、骨格は逞し
く、筋肉は引締り、見るから如何にも矍鑠として日にやけた顔
の色は、壯者の如く赤らみを帯んでゐる。
行者の背後の岩壁は、ちやうど肩の處で、龜の様に穿ち凹めら

れ、そこに二尺ばかりもあらうと思はれる彌勒菩薩の青銅の像が安置してある。それから行者の膝の前には小さい鐵の香爐があつて、香の煙が細々と立昇つてゐる。窟の一隅には行者の錫杖が立掛けてあり、其脇には鐵齒の木屐が片寄せてある。

窟の上り口の取附近く(平舞臺に、斜に行者の方へ向いて手を膝下に結び、頭を垂れ、端坐してゐる若い男がある。韓國の廣足なのである。水に溺れた時とは異つて、肉附もよく、色艶もよくなり、頭髮は梳つて都風に結び、冠り物をいたゞき、一劍を佩び、都紳士らしい服装をしてゐる。既に久しく端坐してゐたらしい。時は十月下旬で、時刻は午後三時過である。森間として鳥の聲さへも聞えない。廣足は、ちやうど此時首を擧げて、鼻を見、さて行者の方をも見たが、やがて、膝を進めて、恭し

廣

く平伏し、徐かに口を開いた。

お聖行中を驚し申しましては、相濟みません儀にござりますが、先刻も申しました通り、都へ出立の時刻が、已に相逼つてをりまする故、失禮を願す、このたび上洛と決心いたしました仔細を、只今申しあげます。何卒お聞届下されませ。其以前に、謹んでお詫を申さねばならぬことがござります。先だつて、陸奥への御不在中、お留守居を拜承りをりまして、屹度お命令を相守るべき筈でござりましたのに、一旦の心得ちがひから、うか／＼御禁斷の西谷へ足踏をいたし、それが爲に、あはや一命をも失はうといたしました。不覺の段は、幾重にもお詫を申しあげます。何卒お宥し下されませ。しかし、聊か分疏の一端とも存じますることがござります。水死を免がれました其當晩、さる農家に一泊いたしました處、忽ち大熱を發し、枕を能擧げませぬ十餘日間の身神惱亂中に、圖らずも一大妙光に接しまして、心眼頓

に開け、はじめて尊師の御教に體達すべき自得の一路をば發明いたしまし
た。すなはち、其日より、界限の者を集め、教化を試みまする傍ら、加持祈
禱をもいたし遣しました處、效驗いちじるしく、僅か一月ほどの間に、難病
平癒、懺悔改心の者數を知らず。畢竟これは、尊師の御餘光ではござります
れど、何卒これを一つの功に、前過をお赦し下されますやう、ひとへに願ひ
あげまする。さて、それにつき、更にお願ひがござりまする。傳聞ります
れば、今や都の風俗は、上下共に甚しく亂れ荒び、之を教へ誡むべき導師と
てもなく、剩さへ、近來惡疫流行し、病める者已に百人千人に及びますれど
も、之を癒す妙藥なく、加持祈禱、袂大祓も何の驗なく、斃るゝ者日に加はり
勿體なくも飛鳥の御門まで同じ御惱に罹らせられ、すなはち全國に勅令し
て、治癒の靈法を求めさせらるゝと拜承り及びまする。つきましては、
わたくし未熟にはござりますれど、尊師のお名代として上洛いたし、第一に

は主上の御惱を平癒させまらせ、第二には下萬民の身心二つの大患をば
相救ひたいと存じまする。何卒暫時のお暇を下しおかれませ。……

斯ういつて更に、恭しく平伏したが、何の答へもないので暫く
して又顔を擧げる。

まだお行が果てぬと見える。……

と獨語を言つて考へてゐたが、又一揖して更に語を繼ぐ。

又二つには、先年仲たがひをして相別れました父親、今は齢も老い、我も折
れ、頻に面會を求めをります由。今は父一人、子一人のわたくし、彼れをも
慰め遣したく、かたぐ上洛を思ひ立ちましたのでござります。……

と言終つて又一度辭儀をしたが、何の返事も無い。

あゝ、まだお行が果てぬらしい。(又空を仰いで、傾きかけたる鼻を見てゐたが、いよく
是非に及ばぬと思ひ定めたらしく、改めて一揖して) 甚だ失禮ではござりますが、おひ

おひ日も傾きまする故、是非なくお暇いたします。いづれ程なく歸山致し、又お目にかゝりまする。おさらばでござります。御機嫌よういらせられませ。

行者
まてく。

廣足起上りて下手へ歩みつゝ、已に降口に足を踏みかける。此時行者は徐るに眼を開き、印を解き、端坐したまはで

と靜かに呼ぶ。廣足直ちに回顧り、「ハ、！」と言ひつゝ、急いで元の處まで歸つて来て手を突き平伏し

お行濟にござりますか？

(靜かに) 主上の御惱を平癒させまゐらす爲に、都へ歸ると言ふか？

さやうにござります。

第二には、下萬民が身心二つの大患を救ひたいが爲に、都へ歸ると言ふか？

廣 行 廣 行

さやうにござります。

又三つには、親を慰めたい爲にと言ふか？

さやうにござります。

廣 行 廣 行

ふゝむ！ 近頃奇特なことぢや。……(暫らくの間點然としてゐたが) 先刻聞いてゐれば、大發熱の最中に、一大妙光に接し、はじめて何事かを自得したとい

うたが、それは何ぢや？

廣 行 廣 行

さればでござります。お山を下りまする以前迄は、尊師のお教をば、只高

い、偉き、尊い、嚴しいとばかり、駭き仰ぎ、如何にして其絶頂に攀ち登り

果すべきかと、手頼なさに苦み、己れ自身さへも疲れ弱り、當惑し、かくては

他人の教化なぞは、思ひも寄らぬことゝ失望いたしをりましたる處、圖らず

も右熱病の發作中に、何處ともなく神の御聲聞え、浴く下根の衆生をして師

道に追隨せしめんとならば、別に一易行道を開け」といふ尊いお告に接しま

した。

ふゝむ！ して其易行道とは！

師は常に、萬人一様に、「人は飽く迄も直ちに活神とならんとこそ願へ。二六時中、寸時も金剛藏王の忿怒の御像を眼中から離すな。本來空の利劍を眞向に揮翳して、我執貪著の妄想を斫拂ひく、あらゆる苦行荒行に肉體を微塵と摧き、一心不亂勇猛に、只慕地に精進せい」と教へさせられます。悲しい哉、末世下根の衆生は、餘りに神に遠くして、獸に近く、随つて御教をば或は怖れ、或は忌み、ますく向上の縁に遠ざかります。是に於て之を救ふの方便として、わたくしは、先づ神獸は一如と説き、必ずしも人の獸に似たることを咎めませず、むしろ獸の天性を礎に其處に神の靈徳を築き成す、是れ行者道の第一門と、斯様に教へましてござりまする。

ふゝむ！ 半神半獸の何方つかずぢやの。… 獸類の天性を、生れるや否や

仁義道德といふ檻に收れて飼馴らし、だんくく矯直さうとするのが唐人共の所謂中和の道ぢや。それさへも、たかゞ、「人間」を作るの道で、「神」となる道ではない。汝は、獸類の天性のまゝを礎にして、其處に神の徳を築かうとする。それは馴らしもせず、鎖にもも繋かずして、虎狼を飼はうとするやうなもの。汝の分際で、その考を持すれば、つまりは獸類らの餌食と成り了はるまでぢや。「神獸一如」なぞとは虎を暴にする力量ある者の言ひ得べきこと。汝なぞには叶はんことぢやわい！

此時上手の奥、深溪の方に當つて、例の山鳴がはじまり、次の問答の間にだんくく激しくなる。行者一寸聞耳を立てる。

(少しく激した體で)師のお言葉ではござりますが、師の平生のお教の如く、強ひて性を矯め、情を殺し、只管肉を滅盡する「力」をのみ養はせまするは、逆も今の凡俗の堪へ得ることではござりませぬ。よし「力」だけは得まするとも、

それは只、冷い、酷い……

と言ひかけるると、行者は静かに併し手強く遮つて

黙れ！ 末世の迷妄を根本から破壊さねばならん時には、先づ「力」ほど大切なものはないわ。「力」の伴はんものは、皆無用ぢや。「力」の伴はん慈悲、力の伴はん深切、力の伴はん諫争、力の伴はん勤行、皆無用ぢや。汝の如きは、何の自力も無い癖に、あちこちの力をば借り集め、或は盗み集め、綴くり合せ、我力の如く見せびらかし、或は之を以て其不所行の分疏となして非を飾る。墮落の捷徑に過ぎぬ二岐路をば、予が教の易行道なぞとは、……こゝな借上者めが！……

突然の一喝に、今までは得意さうにしてゐた廣足は、覺えず「ハッ」と平伏する。行者は徐ろに立ち上り、錫杖を取り、鐵齒の履を穿きて窟から歩み出でながら

小智慧の働く凡俗は、とかく小理窟に長じ、目前の利害に敏く、足下鼻先が見え過ぎて臆病になる。まして汝は、氣位の高い割に根性は柔弱故、おのづと言行に表裏矛盾が生ずる。それを又名聞が手傳うて、強て正當らしい取締はうとするによつて、いよく自罔自欺に墮する。笑止千萬な奴ぢや！ はじめから予とは縁のない奴と思つてゐた。もうよい、歸れ。呼返したのは、都へ歸るのを止めようが爲ではない。かりにも弟子にした奴ゆるゑ、これだけを餞に與らしたのぢや。

斯う言ひすて、行者は窟の右手の半天然の石磴の方へ行かうとする。廣足は急に之を止めて

これはまた御無體なおつしやりやうでござります。言行に表裏があると、あんまりなお叱り！ 最前お詫申しました事の外には何一つ御戒律を破つた覺えはござりません。殊に、諸方から借物の教を以て非を飾り、不所

行の分疏にいたすなごとは、覺えのないことでござります。聊か自得の卑見を加へて、御教を和げましたは、一へに道の爲、君の爲、世の爲にござりま

六

する。

黙れ！ 何一つ戒律を破つた覺えはない？ 破る勇氣があればまだしも、

破りたうても能う破らず、何かな破る口實をと臆病な小智慧計を働かす、そ

れをば外道中の外道といふわい！ やい、汝があゝの西谷で、獸神の呪詛を聽

き、其顛倒の邪見に惑うて心を動かし、かくて次第々々に外道に踏入つたこ

とを、おれが看破かんでゐると思ふかり……

えゝ！

窮處を突かれたらしく、忽ちはつと頭を下げる。

神獸一如なぞと、口がしこう説きをるが、畢竟は、あの獸神につい誓約をし

をつた爲、拔差ならず、又二つには、おのれめが憍慢と名聞との爲さする業

ぢや。……何一つ戒律を破つた覺えはない？ 如何様、汝は、里に留つてゐ

た間に、外形の上では、悉く五戒を保つた、鎖で繋がれた飢犬が、鼻の先の腥

物を能う食はなんだやうに。これ、已に心を動かした位なら、何故いつそ

思ひ切つて獸神に従かぬ？ 生温かい女の手で撫擦らるゝをなつかしみ、

熱病に罹つたを、内々は心に喜び、しかも口先では聖行を説く、其いぢけた

根性が淺ましいわい。笑止な奴ぢや！……

うつむいてゐる廣足の姿を情々眺めて

其服装を見い。行者が都へ登るに、何の爲の其晴衣裳？……心に問うて、

恥かしいとは思はぬか？……

廣足はぢつと頭を垂れてゐる。山鳴おひく、激しくなる。

行者は二足ばかり行きかけたが、又立寄り

末世の憍慢な、剛情な衆生を教化するに微温い中和の道なぞは役に立たん。

殊に誼はしい汝の唱へるやうな似而非中和ぢや。神となるを誓願とする
行者道は「力」を本體とする。獸でも「力」を極めれば、神に近づく。汝は、初
めから神には縁なく、眞人間でもなく、全くの獸にもなれん奴ぢや。早く
都へ歸り、正しい中和の道でも蹈んで、せめても眞人間になれ。：：笑止な
奴ぢや！

言ひすて、行者は石磴を登らうとする。廣足は慌て、追ひ
縫り、其袖をひかへて

廣

あゝもし、どうぞ暫くお待ちなされて下さりませ。恐れ入りましてござり
ます。只今の御嚴訓で、何もかも、夢と醒め、恥入ましてござります。成
程、わたくしは臆病者でござります。名聞の餓鬼でござります。何もかも
わたくしの思ひあがつた憍慢な心からの過失でござります。都へ歸るの
は思ひとゞまり、以後は全く別人と生れ變り、一心不亂に修行いたします。

行

改めてお弟子になされて下さりませ。どうぞ此のたびだけは…
とだんく涙聲になる。山鳴少しくしづまる。

廣

離せ。
こんどだけは、何卒！もう決して二心は抱きません。お腹立は如何にも
御道理でござりますか…

行

袖を拂つて行かうとする。又追ひすがつて袖を捉へる。行
者獨鈷杵を擧げて、軽く一喝する。と廣足は忽ち袖を離し、う
んと言つたざり仰向に倒れる。行者は悠然として見返りも
せず、石磴を登らうとする。途端に、其岩坂道の向うの降口(即
ち大岩の上手の裾窟の背後)へ、前鬼が忽然として上半身を現
した。さうして

前鬼

大變でござります！ 大變でござります！

と叫んで躍り上り、やがて忽ち立停つた行者の前へ駆降りて来て蹲踞つた。

行

(静かに) 葛城めが山へ入込んだか？

前

(息を切つて) さよでござります！ 葛城の女主めが、今までとは異つた凄じ

行

い勢ひで、つい今がたお山へ入込みました。

前

(静かに) よしく。

前

(なほ喘ぎながら) 越の地獄谷の硫黄淵で、四十九日四十九夜、悪魔王になる行をしをつて、業通が自在になりまして、日の光りをも怖らす、さゝへる精霊らを追散して、もう西谷の御封鎖をも破りましたぞや。もう西谷の間近まで来てをります。迎もわしらの行力では防がれません。早うござつて、母子とも御呪縛して下され。一言めも、けふは元氣づいて、偉い力を出

しをります。つい今も大きな枝を壓折りました。……

又激しく山鳴がする。

あれ〜！ 又荒れ出しをつた！ あれ〜！

騒ぐな。大丈夫ぢや。見廻るから、従いて来い。

行

行者は徐かに先に立つて、石磴を登り了り、降り口へ姿を消す前鬼も従つて登り、やがて同じく見えなくなる。

山鳴は次第に薄くなりながら、次の獨白の間も續いてゐる。倒れてゐた廣足がやつと身を起す。顔色蒼然として、半分死んだ者のやうである。横くれりになつて、意氣地なく首をうなだれたまゝで、長い溜息をして

廣

「僣慢な癖に柔弱な根性！」……「何の自力もない癖に、あちらこちらから、いろいろな力を借り集め、盗み集め、綴くり合せ……」……「あゝ、何といふ淺ましい人間ぢやおれは！……成程おれは眞人間にさへも成れん。中和と

いふことが恰ど真中の道といふことなら、其道もおれには行かれん。思ひ切つて険しい行者道は、師匠に見棄てられた上は、最早逆も及びもないことぢやが、程よい、真中を辿るといふことは、尙以ておれには出来ん。と言うて全然獸類になり下つてしまひたうもない。あゝ、どうしたらよからう！

此獨語の中頃に、正面大殿の左の裾に突如として、前幕の女怪——葛城の神——が其裸形の上半身を現す。例の赭黒い丈程の頭髪を獅子の鬣の如く額に肩に振亂して、巨きな口を開き齒を露して、にやりと物凄く笑つたと見る間に、忽ち巖蔭へ姿を隠す。

五年以前、怨めしさと恥づかしさと悔しさとの餘りに、思ひ切つて發心してくれうと思つた其間際には、古への勝者たちにも、何の、決して劣るまいと

思ひあがつてゐたのに、どうして如意な意氣地なしになり下つてしまつたか？ 行者のいはれる通り、本來が名聞氣からであつたのか？ 世の爲、人の爲と思つたのは、其時も、先刻までも、自分で自分を欺いてゐたのであつたか？ ……戒律を破る勇氣があればまだしも！ ……生温かい女の手で撫擦らるゝをなつかしみ！ ……あゝ！ ……

急に兩方の手で頭を抱へて、忽ち其處に臥し轉びて、暫らくは苦悶に堪へかねた體であつたが、やつと又顔を舉げて

あゝ、自分をすら欺さうとするとは、何といふ淺ましい！ あゝ何といふ淺ましい！ ……

斯ういつて、しきりに頭を掻きむしつてゐたが、暫くして

あゝ、どちらが眞實の自分だか、分らんやうになつてしまつた！ あゝ、どちらが眞實の自分だか！ ……

ふと自分の服装に目を附け、更に身邊をつくるく見て、師の行者の口吻で

行者が都へ上るに、何の爲の其晴衣裳！ 心に問うて、恥かしいとは思はぬか？！

又急に苦悶の表情をして、うつむき暫くは無言でゐたが、やゝあつてもう煩悶する氣力さへもなくなつたがやうに、悄然となつて

今更都へ歸られもせず、…此上は死ぬより外に爲様がない。…とはいふものゝ、何か知らず、目に見えん不思議な絆で、後ろ髪を引止められてゐるやうな氣持がして、どうかしてもつと生きてゐたい。…死にたうない。…生きてゐたい。

此獨語の切れる途端に、麓への降口の手前の、通路のありさうにもない絶壁の間から、忽然として一個の村娘が走つて出た。

娘

あゝ、嬉しや〜！ もし逢へなんだら、どうせうかと思つたに、あゝ、嬉しや、嬉しや！

取纏つてもう嬉し泣に泣いてゐる。山鳴が止む。

廣

や、おぬしは！ どうしてまアこんなところへ？ (娘の貌を見、又四下を見廻し、夢ではないかと思ふ様子で) どうして此——女人禁制の——おそろしい處へ？

娘

(すゝり泣をしながら) どのやうに俟つても〜、麓へは降りてござらつしやら

序幕に見えた一軒家の姉娘の比豆知である。肌の色も、あの時よりはすつと白く美しくなり、服装も晴衣らしく華美である。それにも拘らず、籠を背負ひ、手に小鎌を持つてゐるのを見ると、山仕事の途中であるらしく、無雑作に束ねた頭髪の根元には、燃えるやうに紅葉した楓の小枝を挿してゐる。で、先日よりは、すつと妖艶に見える。

娘は廣足の傍へつか〜と駈寄つた。



111



110

けれどなア、斯うしてお互ひのやうにして交際うてゐるのが眞人間ぢやないかえり？ 何もわざとらしく獸類にならなくてもいい。なア、神さまにならうといふ迷ひさへなけりや、いつでも人は眞人間ぢや。(立ちながら俯向いてゐる廣足を見おろし、傲然と) お前は神といふ名前に迷うてゐるのぢや。(俯向いたまへて) あゝ、名前に！…行者もさう言はれた。あゝ、おれは名聞

廣

の餓鬼ぢや！

(小鎌を玩具にして、あちこちと歩きながら) 偉い人間と言はれうが、神さまと言はれ

娘

うが、そんな名前が何にならう？ とりわけ、こんな豆粒のやうな小さな島國に残す名前が何にならう？ 悪い事をして、口を拭うてゐれば、淨名は立たず、控へ目にしてゐれば、村の頑童までが泥礫を投げつけをる。善い名も一時、悪い名も一時ぢや。名前が何にならう！ 臆面せいで面拭うて出歩いてゐりや世間の方で忘れをる。世間は案外に寛大なものぢや。(屈

んで、後から廣足の肩を抱いて覗くやうにして) なア、思ふ存分に生きてこそ、生教があるといふものぢや。世間を憚るには及ばんがな。お前は意地が足らん。意地をば張りなされ意地を。他が右へ行きや、左へ、前へ行きや後ろへ、とりわけ名の聞えた行者のやうな奴の、逆にくと行きや、それが取りも直さず、名を揚げる原にもなるがな。

廣

いや、邪は正に勝たれん定りぢや。行者どのは、世を救ふため、衆生を濟度する爲にせられるのぢや。それぢやのに、おれが若し私慾の爲に――二年越師匠と崇めて、いろ／＼教を受け、恩になつてゐたのに…

娘

(いかにも輕蔑したやうに) 世を救ふ爲ぢや！ 何のあれが世を救ふ爲であらう！ 酷い、我強い、高慢面が、自分勝手の遊び仕事！ 出来そこねたあの磐橋が何になる？ 自力で難所を越せばこそ修行ともなれ、他力で架けた橋は大きな外道ぢや。まして半出來の橋が何にならう？ 彼奴、我を通し

たいばつかりに、衆生濟度を口實に、愚民を惑はし、道にも理にも合はん酷い、苛い訓練方をしをるによつて、一人として隨いて行き得た者はない。あれは心をも身をも殺す教ぢや。あのやうな邪教が何にならう？ あいつは十七で山入をしたといふが、それが眞實なら、淨世の味の酸い甘いを知る暇がなうての悟三昧ぢやによつて、思ひやりの無い筈、酷い筈、邪慳な筈ぢや。(首を垂れたまゝ)とはいへ一旦師匠として恩を受けたあの行者に……恩を言や相身互ひぢやがな。お前は、つい先頃までは、彼奴の爲に水を汲んでやつたり、薪を拾うてやつたりさつしやれたであらう？ なりや此方からも恩を掛たのぢやがな。(頬が摺れくくなるほど顔を寄せて) お前は氣が弱いによつて、今の自分を責め、過去の自分を責め、濟まんくとはかり思つてぢやが、穿鑿立をすりや、世間に疵のない人間は、只の一人もありやせぬぞな。悟り貌のあの行者とても、若い時分には、何をしをつたか知れたものぢやな

い。今ぢやとて、保つてゐるのは、たかゞ五戒ぢや。が、まだ枯木のやうに朽ち果てゝしまつた齡でもないによつて、其の五戒さへも(と言ひかけて窟の方を見返り) 試して見んうちは宛にはなりやせん。

娘が幾ら勵まして見ても、廣足は萎れ果て、更に勇氣を出し
さうにもない。

いや、おれや如何考へても、眞正の人間にもなれず、神にもなれず、獸類にもなれず、都へも歸られず、生きて行く便宜もないによつて、死ぬより外に爲様はない。

娘の表情や態度が、又元の村娘に戻つて

眞の人間、眞の人間と言ひなされるけれどなア、眞の人間ぢやて、偽の人間ぢやて、百までとは生きらりやせんぞな。生きるのは何もむづかしうはない。食うてゆかるれば生きてゆかる。夫婦親子が仲よう暮すことが出來り

や、一生面白うも楽しいも過せるぞな、もし。わしの家へござらつしやれ、
なア、わしの家へ。わしやお前の爲なら、死んでもかまやせんぞな、もし。
なア、もし。……なア。……

娘は廣足に寄り添うて、優しい、柔かい、小さい聲で、頬を摺寄せ
耳こすりするやうにして口説く。廣足は次第に夢を見てぬ
るやうな心持になる。娘は立上つて麓への降口まで行き、振
返つて、手招きする。と廣足は、目を閉いだまゝ、ふらくくと立
つて娘の方へ行く。娘は降口を降りながら、又招く。娘の頭
が見えなくなる。廣足は尙目をふさいだまゝで、これも降口
を降り、見えなくなる。
又山鳴りが聞えはじめる。
窟の後の石磴の登り口へ、ちらり行者の角帽だけが見える。
が、行者は直ちには登つて来ない。やゝあつて全身を現した

のを見みると、先刻のやうに元氣ではなく、氣分でもわるい、か、錫
杖を力に徐ろに降りて来て、窟に近づき、暫く其入口に身を
たせかけて、立停つた。顔の色が著しく變つて、蒼白く見える
やがて太い溜息をして

行

千里の外を透視し、百年の末をも察り知る我此心眼が、何として今日ばかり
は暗んだるぞ？ 愛惜の絆を絶ちかね、已に先頃も我不在中に、一度此處へ
尋ねて来て、空しく立歸られた我老母が、今日又最期の病を押して、はるく
尋ねて来られようとは、今が今までも氣が附かなんだ！（と徐ろに立直り、やがて
印を結び、暫らく瞑目してゐたが）むゝ！ はや山腹まで辿り着かれた。……いたま
しい老の相！……目は盲ひ、腰は弓と曲つて、明日までとは持たぬ病體！
（と言って目を開いて）恩愛の血は枯木の液と乾き果て、六十をも越えたる俺を、
まだ故の通りいたたいけな嬰兒で、もあるかのやうに思つて、川を涉り、山を

お助け下さりませ！ お助け下さりませ！

と言つたきりて暫く泣いてゐる。

行者は次第に寂然となつて、いつの間にか瞑目してしまふ。

山鳴もいつしか止んで、天地ともに閑となる。女は又口を開く。

行者さま、どうぞ妾をお助け下さりませ！ 人間の榮華や恩寵はほんたう

に春の花の一時よりはかないものぢやといふことを、身にしみぐと思

ひ知つた者でござります。此黒髪を根元から切拂うてしまつて、全く男と

なりまして、如何な捨身の難行苦行をも積んで、活神の行者さまに一生お仕

へ申す覺悟をして參つた者でござります。活神さま！ 活神さま！ 罪障

の深い女人の中でも、とりわけて罪障の深い妾でござります！ お慈悲で

ござります。どうぞ、お助け下さりませ！……どうぞ、どうぞ……

折々嗚咽するので言ふことがよくは分らない。行者はやつ
ぱり瞑目してゐる。美女はだん／＼行者の傍へ摺寄つて來
て、泣きながら、とぎれ／＼に言ふ。

十六の秋から今年へ掛けまして、全三年の間……御門の御寵愛を受けまし
て……玉敷の大宮きつて、竝ぶ者もない榮華の身の上となりましたのが、因
果となり、それは／＼口にも言葉にも言ひやうのない、辛／＼苦患を受け
ました。……それが爲に、今更悔んでも歸らん罪業をも犯しました。怖し
い他の嫉妬の煽が、晝となく、夜となく、此身を焚き、讒言の鋭い刃が此胸を
抉り、冤の罪に、たつた一人の……たつた一人の母をも殺され……我身の危
かつたことも、幾たびか、……其怨みやら、身の爲やらで、つい悪い心が起り
此手をこそ汚さね、怖しい陰謀に大勢の血を流させました。……わるいこと
をいたしました。……未來が怖しうござります、ゐても立つてもをられませ

ん。……罪障の深い身を、どうぞ御不便におぼしめし……お弟子になされて下さりませ。……此苦患をお助けなされて下さりませ!

女は又泣伏してしまつた。此時例の麓への降口の下でけたたましい鈴の音がすると同時に、行者さま! 行者さま! とけた、ましく呼ぶ聲が聞え程なく一個の怪物が半身を現す。これは後鬼なのである。手には鐸を持つてゐる。

後鬼

行者さま! ひよんな事になりました! 早う来て下さりませ。お命令通り、早速お傍へ参りまして、お侶の剛力に憑つていろくとおだまし申し、お北堂さまを麓へお伴れ申さうといたしますうちに、何にせい病みほうけでござらつしやるゆるゑ、旅疲れやらお歎きやらで、突然に氣絶してしまはつしやりました! 早う来て下さりませ。早う! 早う!

かう言ひすて、又忽ち姿を没した。端然としてゐた行者の

體がゆれはじめた。其面上には苦痛の影が浮んだ。泣伏してゐた美女はそつと顔をあげて、行者の顔の色を窺つた。

美女

なアもし行者さま! 活神さま! 母御様とても女ぢや。なアもし、母御さまをいとしうお思ひなさるゝお慈悲があるなら、同じ女の性を受けた妾でござります。不便がつて下さりませ。せめて今日だけなりと、お傍において下さりませ。……もし……

行者の膝に恐るゝ手をかけてゆすぶる。行者の顔に苦悶の色が見える。

母御さまも女なりや、わたしも女ぢや。同じやうに、假に此世に生を受けた女ぢや。何が異ふ? どう異ふ? つれなうなさるのは不道理ぢや。もぎだうどや。理が通らん。無理ぢや。無理ぢや! 無理ぢや! ……

又突伏してヒステリックに泣き出す。行者の顔の苦悶の色

ば、やうやく消えて、次第に端殿の相が加はる。只顔の色だけは平生とは異つて眞蒼になつてゐる。

女をば不浄な者ぢや、汚らばしい者ぢやと言ひふらしなされた釋迦無尼佛

さまが怨めしい！ 何が不浄ぢや？ 男と如何異ふ？ 如何劣る？ 男に

は自己一代を作り變る力はあつても、新しい代を作る力はない。世の中に

女が無かつたら、新しい世は生れん。人を生むも育てるも導くも、みんな

みんな女の力ぢや。それなりやこそ慈悲を司る菩薩たちは、どれもく女

相ぢや。なアもし、あなたがまだ幼稚けなお兒さんであつたところに、雪霜

の降る冬の夜半も、我身を忘れて抱きかゝへて、いとしがり、ぬくめたは、

(と言ひながら襟元をくつろけて) これ此温滑な、柔順な肌ぢや。なア、——これが

こなたの懐かしがつてお吸やつた乳ぢや、——此ふくよかな、ぬくい、柔い

乳は、取りも直さず母御さまのおやさしい面影ぢや。世の中にこれほどな

づかしいものが又とあらうか？ 女人の肌を男子が慕ふのに何の不思議がある？

幼い頃の最も懐かしい思ひ出はこれぢや。命にも易へる、浮世の

最上の喜びはこれぢや。(今までの氣高きがいつの間にも消えて、目にも口附にも姿態に

も、人を蕩す妖艶の氣のみが溢れてゐる) 榮華も權勢も名譽も富も健康も、此喜びが

なかつたら、何の生きてゐる甲斐があらう？ 幼い時か、春を知る頃か、浮

世の艱みに疲れた頃か、いつか一度一生中に、女人の情の有難さを思ひ知ら

ん男があらうか？ なア、悟るに四季は無い。正覺成道は七十八十になつ

てからでも晩うはない。此喜びには季がある。其季を逃いたら、もう二度

とは來ん！…此喜びを知り盡いて、さうして捨て、こそ眞實の悟ぢや。

…や！ こなたは存外に弱い方ぢやなア！ これ、此肌を見ては悟られぬ

かいな。此手に觸つては氣が散るかいな。…なアもし。…なア。…

又行者の膝に手を掛けて狎れくしくゆすぶる。行者は寂

然として全然石の像のやうである。

え、洞慾ぢや！ これほど事をわけていふものを聴いてくれん！ 何たる酷い人ぢや！ あゝ、悲しや！ 悲しや！ (狂人のやうになつて) あゝ！ わしやもう氣がちがひさうぢや！ …あゝ！ …あゝ、わしや氣がちがふ！ 氣がちがふ！ …

だしぬけに躍り起きて、そこらを走り廻る。其中に黒髪は自然と解けて亂れた絲のやうになる。我れと我が被てゐるものを引きちぎつては抛つので、腕や胸や脛の邊は半露はになる。やがて又行者の傍へ走り寄つて、その前後左右に顛倒し轉輾して、或は媚び、或は戯れ、或はしなだれ、狂態の限りを盡くす。

え、此憎い！ 活神さまめが！ 怨めしい、もぎだうな活神さまめ！ なア、これ、せめてもわしの冥加の爲ぢや。 さ、活神さまの手で此手をば握つ

て下され。 さ、一寸握つて下され。 あゝ、せめて其蒼い、尊さうな頬へ觸りたい。(兩手を行者の肩へ掛けて) さ。 おゝ、石佛のやうかと思つたら、あゝ嬉しや！ やつぱり温い血が通うてゐる！ さ、冥加の爲ぢや、活神さまの息を此口へ吹込んで下され。 さ、此口へ！

此時までは寂然と石の像のやうになつてゐた行者が、今唇をさしつけた妖婦の體へ、其手を觸れたかと見る間もなく、女は二三間此方へ忽ちころくと抛出された。が、すぐに猫のやうに、ひらり中返りして起上つて、猛然として飛びかゝらうとする。と、行者はすつくと立上つて、大きな聲で

行者

喝!! …邪神めが!

妖婦は、くるくると居どこで三度計り獨樂のやうに廻つたが、廻り止まると身を翻し、飛ぶやうに例の胸壁際まで逃げ、岩槽の上へ突立つて髪を逆立て、口を開き、眼を嗔らし、肘を張り、身

がまへして行者の方を見返る。行者は言葉鋭く

あざとい己れなぞの業通で惑はされる行者と思ふか？ たつた一疋の白蟻を這込ます穴からも雲に沖る喬木が朽ち倒れる。たつた一縷断ち残いた「母」といふ執著の目に見えん鐵線にからみつかれて(大息をつきて)五十年を一日のおれの行の息の根が、すんでの事に縊られうとした惱亂の隙に乘じ、おのれ、大膽にも邪姦を勧めて、墮さうとしをつたな。おれの顔色に苦痛の見えたを、おのれが誘惑のきいた故と思ひをつたか、おろか者め！ ありや大正覺 大成道の最後の産苦ぢや！ たつた一重残つてゐた最後の執著の生皮を、此魂から剥がる、苦悶ぢや！ 喝!!

女怪は只一聲岩を突裂くやうな苦叫を發して、忽ち千尋の谷間を目がけ、身を跳して躍り入つてしまつた。行者は更に大息を吐きて

天上天下只一つの大きい「我」あるのみぢや！ 不滅不増、絶待常住の「我」あるのみぢや！ 彼れ我れと別つ我れはない。人間も無ければ、禽獸もなく、鬼神もない。母もなければ子もなく、男もなければ女もない。善もない、悪もない、生もない、死もない。只有る者は大いなる「我」の力ばかりぢや。(ふと窟の方を見て)む、あれぢや！ あれが予の魂の息の根を縊らうとしたのであつたわ！……

つかく、と窟の中に入り、内に安置してある彌勒菩薩の青銅像を持って出る、如何にも軽々と。日が暮れかける。

末世憍慢の衆生は、ひとへに顛倒の邪見に著して、相批議し、相誹謗して止まんのを、智慧で化度せうとするのは、底無しの井戸の溺死人を我れもそこに躍り込んで救ひ上げようとするやうなものぢや。……況んや如是柔順な

御相では、我慢剛情で乾固つた濁世の人間を濟度することは思ひもよらん。智慧と慈悲とに於ては無能勝と崇められなされる彌勒菩薩どの！ お前さんを手の本尊佛と心の奥の龕の内に祀つておいたのが、たつた一つ拂ひ残した魂の埃であつたのぢや！ 廣足めの小才覺を叱咤した其口の下から、生中の慈悲の爲に、智慧の爲に、あぶなく自分を欺くところであつた！ ああ、もう慈悲もない、無慈悲もない。只有るものは大いなる「我」の力ばかりぢや。

手に持つた彌勒佛を落すやうに地上に抛つ。又山鳴がはじまる。麓に當つて角を吹鳴らす音がだんく高く聞える。此時麓への降口から韓國の廣足が再び登つて来る。服装は先刻と異なることもないが、心の作用に何か變化があつたらしく、着かつた顔色も常に復し、得意さうでもないが、不安らしい體も見えぬ。行者の前まで来ると、恭しく跪きて敬禮する。

廣 行

行者は立つたまゝで、徐ろに見返り

おれには最早縁のない奴、何しに来た？ 御勘當のお詫びに参つたのではござりませぬ。幾たびも迷ひに迷ひましたる末、先刻再び妖魔の爲に、あはや誑惑せられようといはしましたが、きびしい御教訓を受けました餘德によつて、辛うじてそれを脱れ、いよく眞人間になることを目的に、都に歸らうと決心いたしました。それ故改めて、お暇乞にあがりましてのでござります。一つは又、聊か御恩返しがいしたい爲でござります。

何ぢや？ 恩返しぢや？

行者は徐ろに傍らの岩に腰を掛ける。廣足は跪坐いたまゝでゐる。

廣

先刻さる妖しき女に誘はれ、夢心地にて麓へ下ります途すがら、師のお

身の上みの上に、思おもひがけない御災厄ごさいやくが逼せまり居をりますることを傳聞うけたまはりました。何者なにものの讒訴ざんそにや、師しが此このお山やまに籠こもらせられたは、畢竟ひつぎやうにつほんたく日本國にほんこくを魔界まかいとなさん逆心ぎやくしんあつて御門みかどを調伏ていふくの爲ためなり、云々しかぐとの誣言しごご。二つには多年たねん邪法じやほうを修しゆし、愚民みんを誑惑きやうわくするの罪つみとござりまする。程ほどなくこれへ討手うっての者ものが押寄おしよせ參まゐりませう程ほどに、片時へんしも早くお立退たちひきなされませ。それを知らせるのを、恩返おんがへしぢやといふかり。いや、そればかりではござりませぬ。只今改ただいまあらためて登山とざんいたしまする途中とちゆう、圖はからずも師しの母御様ははごさまにお目めにかゝりました。堪たへがたい御愛惜ごあいじやくの餘あまり、甚はなはだしう病やみ疲つかれさせられた御老體ごらうたいにおはしながら、剛力がうりきに扶たすけられ、已すでに麓ふもとから殆ほとんど三里さんりほども登のぼらせられましたる處ところ、險阻けんそんに惱なやみ、御病氣ごびやうき募もつり、九死しゅうし一生しやうの御有様ごんありさま。ちやうどわたくし參まゐり合あはせ、御介抱ごかいほう申しあげ、取敢とりあへず但有ある樵夫しやうふの假小舎かりこやへ一先ひとまづ御休息ごきゅうそくおさせ申まをしては參まゐりましたもの、最も

心懸こころがりに存ぞんじまする事は、早はや其近邊そのきんぺんまで討手うっての近ちかづきをりますることとでござります。萬一まんにも母御ははごさまをば彼等見附かれらみつけませうならば、御大事ごんたいじにござります。必ずかならずや母御様ははごさまを人質ひとじちとなし、否應いややうなしに師しを捕とらへようと致いたすに相違さうゐござりませぬ。前鬼ぜんき、後鬼ごきにお命めいじあつて、御猶豫ごいうよなく、南口みなみぐちから母御ははごさまをお落おとしなされ、なほ尊師そんしにも早速御下山さつそくごけざんなされますやう、只管ひたすらお勸すすめ申まをします。討手うっては已すでに四方八方はうはうを隙間すきまなく取圍とりかこんでをりますゆゑ、師御しご自身の御法力ごはふりきで御擁護遊ごようごあそばさねば叶かなひますまい。

廣足ひろたるは言葉ことばせはしく述立のべたてたが、行者ぎやうじやは自若じじやくとして、更さらに色いろをも動うごかさなない。

大誓願たいせいがんを立て、此山このやまに登のぼつた予おれぢや。其本願そのほんぐわんの成就じやうじゆせんうちは、どんな事ことがあつても下山げざんはせん。では、母御ははごさまの御一命ごめいにかゝはりましても。

行

(儼然として) おれには母は無い。有るものは大いなる「我」の力ばかりぢや。

暫くは雙方無言。角の聲が殺氣を帯んで聞える。

廣

成程、行者道からは、さやう仰せられますものも、御尤でござりませう。では、是非に及びませぬ、これにてお暇をいたします。 (と立ちあがり、行きかけたが、御安心なされませ、幸ひ都へ歸りまする廣足、御恩返しのため、竊に母御さまを御介抱いたしましたして、討手の兵士等の目を眩まし、何とかしてお落し申しませう。おさらばでござります。

廣足行きかける。

行

(手強く) 待て!...無禮者めが!

廣足立ちどまる。

汝なぞの力を借りる行者と思ふか? ...やい、若しおれが私情に著して、母を救はうと思ふならば、平生鬼神をも精霊をも自由自在に驅り使ふ神通力

のおれぢや、他力を借りるには及ばんわい! 行者道に取つては、他力は魔障ぢや。

廣

では、見すく、お齡よられた實の母御さまをすらも?

行

くどい! おれは「力」ぢや。「力」には母はないわい!

廣足は再び何か言はうとしたが、思ひ返したらしく口をつぐみ、黙つて一揖して起ち上り、降口の方へ五六歩行きて、見返ると行者は窟の方へ歩みて、先刻棄てた彌勒菩薩の像に目を注いでゐる。

廣

(獨自) 神の道は、果してそれほど峻しい、酷い、冷いものであらうか? 竝の人間に歸らうと思ひ立つて見れば、いよくおれは神の道には縁はないわい!

考に沈んだ體で、徐かに麓へと降りて行く。日が暮れる。角

の聲が近づく。

行

(彌勒の像を見下してゐた目をあげて、空を見上げながら) かりにも他力を恃んだのは、俺の拂ひ残してゐた惑ひの一つぢや。あの獸神を呪縛した禁厭の力さへも、今思へば一種の他力であつたわ! もうこれからは、何物をも恃まん。我が信念の外に何物をも恃まん。信念は「力」ぢや。「力」は信念ぢや。(また脚下の像に目を附け) 只一時を緩ゆる麻酔藥のやうな柔輦佛、おのしのやうなものが何にならう? 元の土塊へ戻つてしまへ!

像を提げて、胸壁の方へ歩み、やがて谷の方へ抛つ。山鳴また激しくなる。と石磴の登口から、前鬼が又あわただしく駈降りて来る。

前

行者さま! 行者さま! とうく葛城の神めが西谷へ入込みましたぞや早う来て下さりませ。わしらの行力ではどうすることも出来ません。一

言めがどえらい力を出しをります。今にも幹を引裂いて、樟から脱出さうも知れませんか! 行者さま! 行者さま!

行者の前に跪いて、急きたて、又登口へ駈登つて、彼方を見おろし、又駈降りて来て行者の袖を引き、早く取押へに行けと種々と手真似をする。行者はそれには關はず

(獨語に) おれの定業盡きた後まで、「力」の教だけは傳へておかう。...

今にも脱出しをるかも知れませんか。早う来て下さりませ。...

「力」の像を残しておけば、たとひ此後...

行者さま! もし! もし!

山鳴ますく、激しく、角の聲はだんく近づく。四方はだんだん暗くなつたが、討手は松明をともし連れて来ると見えて、下手の空が薄赤い。前鬼は堪へかねたらしく、身を翻し、飛ぶ

前行 前行

如く石磴を駈登り忽ち見えすなる。

行

おれが此世にをらすなつても……むゝ！

此途端思ひがけぬ岩櫓の右手を攀ちて後鬼が跳り登つた。

後鬼

大變でござります！ 大變でござります！

と息を切つて行者の前へ駈寄り、轉ぶやうに突伏したが、二の句を繼ぎ得ないで泣いてゐる。

行

(静かに) 老母が討手の者に捕まつたか？

後鬼

(嗚咽しながら) さよぢや！ さよぢや！ どうしませうぞい！ どうしませ

うぞい！ 隠れさつしやらう暇も無かつたのぢや。(行者は自若として立つたま

ま瞑目してゐる。) 討手の者は好人質ぢやというて荒けなくお老母さまを引

立てをりまする！ 若しこなたさまが素直に囚人にならつしやらねば、お

老母さまを直刺殺すと言つてをりまする。どうしませうぞい！ どうし

ませうぞい！

降口の彼方が炬火でおひく明るくなり、多勢の聲が聞える。

あれく！ もうそこへ來をりました！ 行者さま！ 行者さま！

後鬼は、あちこち走りまはりて騒ぐ。

之より先、行者は、それには關はず、石磴に登り、ちやうど窟の頂きに當る處に立つて、大岩をきつと見あげて獨語に

行

おれの五十年の勤行に驗があるなら、三十餘年棲み慣れた此窟の大巖よ、我が念力と行力とによつて、在りかたのまゝ立ちどころに、左手に三股杵を握り、右手を開き腹を壓へて降魔の相を成し、兩脚を上下にして天地經緯の相を示させられる金剛藏王の像と現せよ。大忿怒、大勇猛の像と現せよ。

行者は、餘ら合掌し、道場觀を念じて、孔雀經を誦しはじめる。

壇上有金色孔雀王、其上有白色蓮花、蓮花上有庾字、變成

孔雀尾、尾變成孔雀明王、住慈悲相具四臂、……

どつと鬨の聲が起る。後鬼はいよ／＼狼狽して又降口まで駈行きて下を見おろす。と、下から明晃々たる矛の鋒が一本ぬつと出る。後鬼驚いて飛退く。此間行者は誦經を續ける。

右變第一手執開敷蓮花、第二手持具緣果、左第一手當心

持吉祥果、第二手執三五莖孔雀尾、七佛慈氏、四辟支佛、

四大聲聞、八方天王廿九部、夜叉大將、諸鬼神衆、并諸宿

曜十二宮神等、前後圍繞。

此誦經中に降口へ討手の頭人の武官が半身を現す。

武官

やい／＼、其方が役の小角か？ 上意ぢや。きつと承れ。……其方年來邪法を修し、愚民を惑はし、剩へ恐れ多くも天朝に對し奉つて、大逆を企つる

の由訴人あつて明白なれば、朝命を承り、召捕の爲に相向うた。……

行者は鬨はす誦經を續ける。後鬼は頻に氣を揉む。

速かに下山せい。早速下山すれば、御仁政とあつて、罪科幾等を減ぜさせ

られる。萬一手向致す時は、こゝに召連れをる其方の老母を、立地に於て

誅戮に及ぶぞ。……さ、どうぢや？ 速かに下山するか？ どうぢや？

口では手強くいふが、行者を怖しく思ふと見えて、登つては來ない。「さ、どうぢや？」といふ頭人の言葉の切目に部下の者が鬨の聲を擧げる。

これより先行者は經を誦了つて、更に聲聞印を結んで、眞言を唱へはじめぬ。

南廩、三曼多、勃駄喃、計都、鉢羅底也、耶微藥怛、迦羅磨、
爾社多併。

此眞言を唱ふること數遍に及ぶ。其中に頭人は降りて行つた。後鬼は前に女怪が駈登つた岩櫓の上へ走り上りて下手を見おろしてゐたが、忽ちけたましく

後 あれ〜！ 凄じい劍を抜きをりまする！ あれ〜、お老母さまをば引立てをりまする！

後鬼は行者の方を見て叫ぶ。途端に、頭人の武官が再び出て來た。

武官 やい、小角！ 尋常に下山するか？ 老母の喉笛を掻切らうか？ さ、どうぢや？ (又鬨の聲) 只今角を二度吹鳴らす。其間に返答せんと、老母の命は無いぞ。

と言ひすて、又姿を消す。
此中行者は第一の眞言を唱へ了つて、更に七佛の印明即ち普印を結んで一切心眞言を唱へはじめぬ。

行者 南麼、三曼多、勃駄喃、薩婆、勃駄菩提、薩怛縛、干栗駄耶、惹吠奢儻、南麼薩婆、尾帝莎訶。

此時石磴の彼方から前鬼が、けたましく

前 行者さま！ 行者さま！…… と叫びつゝ、石磴の頂きへ駈登り、やがて此方へ駈降りながら

もう迎も防ぎ切れません！ 卑怯な弱蟲の精靈等は、どいつもこいつも變心しをつて、獸神めの眷屬になりをりましたぞや！ 今にも樟から脱出をりまする！ 葛城めが焔の息を吹きかけ吹きかけて、樟をば焼き切らうとしてをります。早う來て下さりませ。…… 行者さま！ 行者さま！……

行者の傍へ駈寄つて、其袖を引動かす。
此時第一回の角を吹鳴す。後鬼はまた岩櫓へ駈登つて下を見

後 あれ〜、お老母さまの胸元を！ 胸元を！……

山鳴り 山鳴りすさまじくなる。

行者さま！ 行者さま！……

行者更ぎやうじやさらに慈氏印じししんを結むすぶ。第二回だいにくわいの角かくを吹鳴ふきならす。

行者 南麼、三曼多、勃駄喃、阿爾南闍耶、薩婆薩怛嚩、奢耶弩曷

帝、莎訶。

後 あれ〜！ あれ〜！

山鳴り 山鳴りす〜 激はげしくなる。前鬼ぜんきも行者ぎやうじやから離はなれて、岩槽いはやぐらへ駈かけ上あがつて後鬼ごきと共に氣きを揉もむ。行者更ぎやうじやさらに縁覺印えんかくいんを結むすぶ。第三

回くわいの角かくを吹鳴ふきならす。

行者 南麼、三曼多、勃駄喃、嚩

前鬼ぜんき、後鬼ごき苦叫くけうを發はつして岩いはの上うへからころげ落おち、其そのまゝ行者ぎやうじやの

後前

立たつてゐる岩頭がんとうを見上みあげて身みもだへし
とう〜お老母おふくろさまを……！ お老母おふくろさまを……！

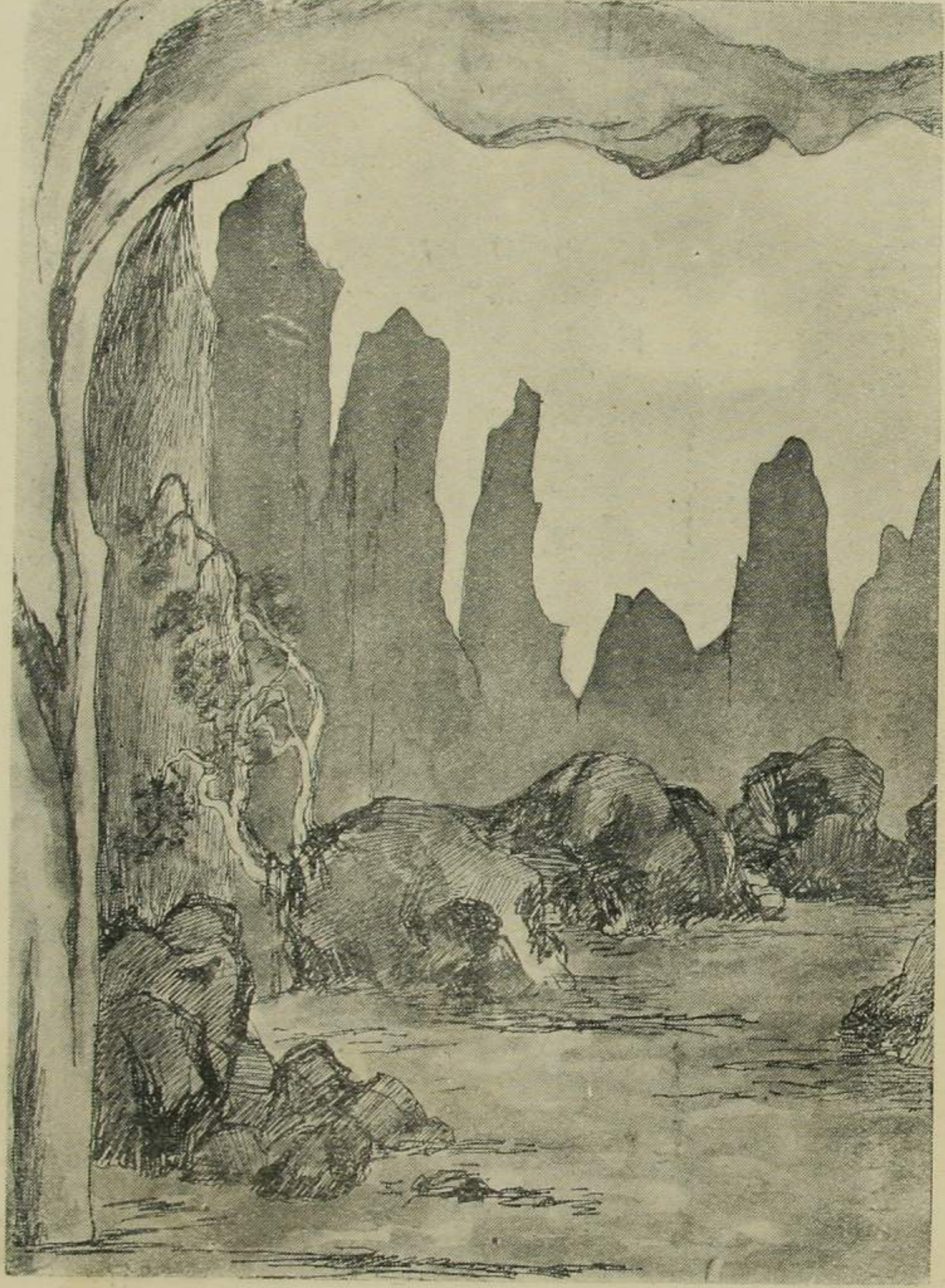
と突伏つつぶして泣なく。降口りやくちの下したで鬨こゑの聲こゑを擧あげる。行者ぎやうじやはそれ
に關かゑはず、更さらに根本印こんほんいんを結むすんで、次つぎの眞言しんごんを繰返くりかへし〜 一心しん不ふ

亂らんに祈いのり立たてる。
唵麼庚囉、訖蘭帝、婆嚩訶。

山鳴り 山鳴りす〜 凄すさしく、窟くわがゆら〜と震動しんどうする。其頂そのいこき其他そのた

の岩石がんせきのあちこちが、すさまじい響ひびきと共に、がら〜がら
からと碎くだけ落おちる。破片はへんが雨あめと飛とぶ。行者ぎやうじやが祈いのつてゐる身しん

邊べんへも大小たいせうの岩石がんせきが亂みだれ落おちる。土煙つちけりが朦々もうろうと起おつ。討手うって
の方ほうへも、胸壁きょうへきの一部いぶが崩くづれ落おちたらしく、「わあ！と多勢おほせの叫さけ
ぶ聲こゑがして、麓ふもとの方ほうへ逃走にげはしる足音あしおとが聞きえる。松明たきまつの光ひかりが薄うすく
なり、やがて下手しもてが眞暗まっくらになつてしまふ。前鬼ぜんきと後鬼ごきとは、狼



一四七



一四六

行

南無や此大巖よ、たちどころに金剛藏王の像と現ぜよ！

喝！！

一貫
狼へながらも行者の身を氣遣つて石磴を駈上り、岩頭から離れさせようとするらしいが、落来る岩石に恐れをなして、行者の傍へ近づき得ない。

此一喝と同時に、窟の頂きに近く突出してゐた最大の奇岩が、すさまじい大音響と共に墜落したらしい。と又一しきり摧け落ちる岩石の雨、四方は夜の闇と土煙とで、忽ち暝朦となつてしまつた。前鬼と後鬼とは、此大音響で、わつと叫んで、尻居に倒れた。

やがて次第に闇は薄れて来たが、行者の姿も、前鬼後鬼の姿も見えない。鳴動は忽然として止んでしまつた。

天地闕寂として、死果てたやうである。

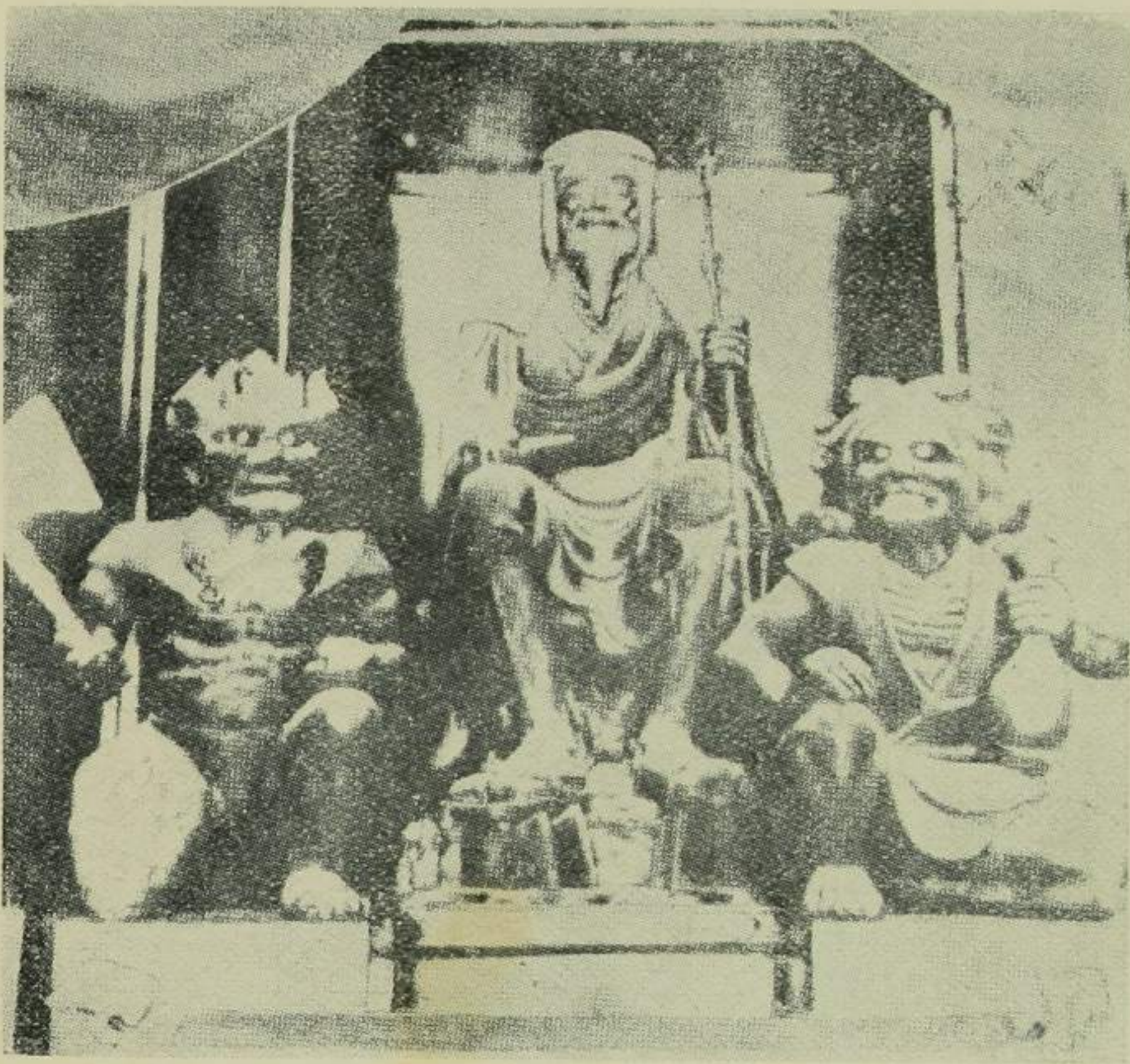
巨巖は依然として、眞黒に空を摩して嶄然として屹立してゐる。

る。

と見ると、其の形が前とは全く異つてしまつた。嗚呼、是れ眞の天工！雲際に聳え立つ金剛藏王の大忿怒の立像！

空はいつの間にも、やら紺碧のやうに晴渡つて、大天井が、嶽の彼方に、物すごく燦めく北斗七星。其此方に、ふはくと流れて行くのかとも見える綿毛のやうな白雲が一片！

前鬼と後鬼とが、又どこからか出て来た。行者を捜すらしく、いかにも懸念さうに、あちこちと駈廻つたが、前鬼はふと顔をあげて、北方に漂ふ綿毛のやうな白雲に目を附け、急に後鬼の袖を引き、崖際まで連れていつて、白雲を指さし示す。暫く何か囁きあひ、指さし爲つ、うなづきあつてゐたが、遂に二人とも膝まづいて、恭しく合掌し、白雲の漂ふ方を拜む。遠くで角の聲が聞える。



「役行者」は著者の許諾なくして興行するを禁ず

附 録

其 一

役の行者の傳説は、多分「續日本紀」、「元亨釋書」、「扶桑略記」、「日本靈異記」等に見えてゐるのが、其最も古いものであらう。

「續日本紀」には、文武天皇三年五月の條下に、斯うある。「役ノ君小角ヲ伊豆ノ國ニ流ス。初メ小角葛城山ニ住ミ、呪術ヲ以テ外ニ稱セラル。從五位ノ下韓國連廣足コレヲ師トス。後其能ヲ害シ、讒スルニ妖惑ヲ以テス。故ニ遠流ニ配セラル。世ニ相傳ヘテ云フ、小角能ク鬼神ヲ役使シ、水ヲ汲ミ、薪ヲ採ラシム、若シ命ヲ用ヒザレバ即チ以テ之ヲ呪繩ス」と。「元亨釋書」のは、やゝ詳しい。「役小角ハ賀茂ノ役公氏、今ノ高賀茂ト云フ者ナリ。和州葛城上郡茅原村ノ人ナリ。少ウシテ敏悟

博學、兼ネテ佛乘ヲ學ブ。年三十二ニシテ葛木山ニ入りテ、巖窟ニ居ルコト三十餘歲、孔雀明王ノ呪ヲ持シ、五色ノ雲ニ駕シ、仙府ニ優遊シ、鬼神ヲ驅逐シ、以テ使令トナス。日域ノ靈山修歴殆ト遍シ。一日山神ニ告ゲテ曰ク、葛木ノ嶺ヨリ金峯山ニ臻ル、其間危険ニシテ苦行者ト雖モ猶或ハ難ンズ。汝等石橋ヲ架シテ行路ヲ通ゼヨト。衆神命ヲ受ケテ夜々岩石ヲ運ンデ、榮構ヲ督ス。小角神ヲ呵ツテ曰ク何ゾ早く成サハルト。對ヘテ曰ク、葛城峯ノ一言主ノ神、其形甚タ醜シ、晝ノ役ヲ難ンデ、夜ヲ待チテ出ヅ、故ヲ以テ遲シト。小角一言主ヲ促ス。一言主肯ハズ。小角怒ツテ呪縛シテ之ヲ深谷ニ繫グ。一言主宮人ニ託シテ曰ク、我レハ是レ逆寇ヲ管スル神ナリ。竊カニ役小角ヲ見ルニ、潜カニ國家ヲ窺フ。急ニ治メズンバ、殆ト危カラント。宮人以テ聞ユ。文武帝勅ヲ下シテ小角ヲ召ス。小角空ニ騰ツテ飛ビ去ル。追捕スルヲ得ズ。官吏計略ヲ設ケテ其母ヲ收ム。小角已ムヲ得ズ。自ラ來リテ囚ハル。便チ豆州大島ニ配ス。居ルコト三年、晝ハ禁ヲ守リテ居リ、

夜ハ必ズ富士山ニ登ル。行道ハ海ヲ踏ンデ走リ、陸ヲ行クガ如シ。其疾キコト飛鳥モ及ブベカラズ。黎明ニハ島ニ歸ル。大寶元年放チ廻ス。京師ニ近ヅイテ虛ヲ凌ギテ飛ビ去リス。世ニ曰フ、小角自ラ草座ニ坐シテ、母ヲ鉢ニ載セテ、海ニ泛ンデ唐ニ入リスト。役の行者の事蹟は、我國の傳説中の、最も神秘的な、又最も雄大なもの、隨一であるのに、何故か、劇にも小説にも餘り取入れられて居らぬ。淨瑠璃の「役行者大峯櫻」の如きも、行者の事はほんの附けたりである。此脚本「役の行者」は行者傳説に據つたが、事柄は全く別である。中にも一言主と葛城とを二體に別ち、葛城山であるべきを大峯とし、大峯を實際より遙かに大いなる山とし、澗に石索で繫縛された一言主を樟の幹に挟まれたとしたなどは、悉く作者の空想である。即ち此作は、史蹟にも、故實にも、實際の地理にも少しも拘牽される所のないものだと承知せられたい。

役ノ行者の傳記は、上に擧げたもの、外にも、まだいろくあるが、それら古今の俗傳を總合してや、巧みに小説的色彩を帯びしめたものとも見做すべきは、好華堂野亭(山田案山子)の「扶桑皇統記」中のそれであらうと思ふから、下に附載する。

文武天皇御即位 役行者流罪神變

珂璃太子已に四十二代の帝位に即かせ給ふ。是を文武天皇と申し奉る。御諱は天之眞宗豊、御父は草壁皇子、御母は天智帝の皇女なり。持統天皇の御孫にてましませば、天皇殊更に鐘愛み給ひ、藤原淡海公の女宮子媛と申すは、其頃天下に雙びなき美人の聞え有りければ、則ち入内させ給ひて皇后に立て給ひけり。帝は未だ御若年なれども、智徳兼備し給ふ明君なる上、高市王是を補佐し奉りて、専ら四海に仁政を施し給ふが故、八島の果までも浪風立たず、萬民腹鼓を拍つて太平をぞ

謠ひける。帝先帝統に太上天皇の尊號を奉り給ふ。吾朝太上天皇の始めなり。時に文武天皇御即位二年の夏大いに旱し、五穀枯れいたみ泉も川も水涸ければ、萬民大いに困窮しけり。帝これを憂ひ歎かせ給ひ、朕不肖の身を以て十善の帝位を汚す事を天神地祇の咎め給ふなるべし。史記にも夏禹王の世に大いに旱魃せしかば、禹王自ら雨を祈らんと薪を積んで祈雨の壇とし、其上へ登りて天に向ひ、自ら罪を算へ、若し雨を下だし給はずんば立所に焼死せんと、已に薪に火をかけられるに、忽ち大雨降つて赤土を潤し、民の患を救ひ給ひしとぞ。朕是に倣ひ、身の罪を訟へて雨を祈らんと詔りし給ひ、禁廷の大庭に壇を設けさせて、天皇沐浴齋戒なし給ひ、淨衣を着して壇へ登り給ひ、焼くが如き炎日に照蒸され給ひ、一心不亂に雨を祈らせ給ふぞ難有き。是に依り公卿百官も壇下の四方の大地に平伏して、俱に雨をぞ祈りける。斯て帝悃祈し給ふこと三日に及びけるに、高天も聖徳を感納し給ひけん、三日目の申の刻過ぎより、忽ち密雲四方の山々より起つて一天に充

ると等しく、沛然として大雨盆を傾くるが如く降出しけるにぞ、帝大いに怡ばせ給ひ、天地四方を拜して壇を下り、宮中に入御なし給ひけり。三公九卿及び百司官雀躍して萬歳を唱へ、勇み悦ぶこと限りなし。去程に豪雨降ること三日三夜降り通しければ、枯れたる稻青々となり、其餘田畠の作物蔓物舊に返り、池泉川々も水充滿しけるにぞ、諸國の人民大いに怡び、是吾大君の御恤みにて斯く甘露に等しき雨降り、我徒の飢渴を救ひ給へり、と帝徳を感拜して、勇み踊らざる者はなかりけり。其年の秋は五穀とも稔多く、萬民大いに富けるは、全く帝の御徳による所なり。

同じく三年、役の小角といへる有髪の験者を伊豆國へ流刑になされける。抑、役の小角と申すは、大和國葛城上の郡茅原郷の産にて、父を役公氏と呼べり。人皇三十五代舒明天皇五年癸巳の三月、役の公氏の妻、天より一の獨股杵降りて口中に入るを夢見て妊娠し、十月立つて同じく六年甲午の春正月元旦に一男子を生めり。

面貌異相にして形體魁梧いに、頗る尋常の赤子と異なり。名を小角と號けて育つるに、幼少の時より自餘の小兒と遊戯ぶ事を好まず、只山林に入つて獨り遊べり。十三歳に及ぶ頃、誰に學ぶともなく密乗を感悟し、能く孔雀明王の呪、不動の眞言を持誦し、雨中に笠を被ざれども衣服を濡らさず、常に行歩するに足駄を履て蠢蟲を踏まず、藤を編んで衣とし、菓を食として佛道を鍊修し、十七歳にて河州金剛山へ登り修行しけるに、一日淵に微妙の聲あるを聞いて、溪へ分下り、不期法起菩薩に拜謁し、菩薩の説法を聽聞して三昧を得し、山上に一字の草堂を建て、法起菩薩の尊像を刻んで安置し、金剛山に籠り住むこと凡そ十年。齊明天皇戊午、小角二十五歳に及び、金剛山を出でて攝州に到れり。三月十七日箕面山へ登り、澗の流に浜つて分入り、尋行くに三重の瀧あり。最上の瀧は高さ二十一丈、是雄瀧なり。第二は瓔珞の瀧にて、岩石飛泉玉を串けるが如し、因て瓔珞の瀧と號く。第三は雌瀧なり、高さ十五丈餘、宛も布を曝せるが如し。頂上の瀧壺には龍栖めり、其

長三丈、折々黒雲を吐いて雨を降らせり。今も早越の年は此箕面の瀧、小角此瀧壺の邊に
弗庵を結び栖んで、丹誠を凝して苦行しけるに、同年四月十七日の夜の夢に、心
に瀧壺の底を知らばやと思ひ、淵の中へ飛入り底深く到れば、却つて水なく一座
の城廓あつて石門を鎖したり。小角心に何人の栖にやと少時く停止みて内の動
静を聞くに、幽に伎樂の韻聞えたり。依て不動の眞言を誦すること數百遍におよ
ぶ頃、忽ち門内に聲あつて問うて曰く、門外に眞言を誦せるは誰人ぞやと、小角答
へて、我は葛城の役の小角なり。然いふ人は誰ぞ。門内より答へて、我は是徳善
大王なりとて、即ち門を開いて小角を請じ入れ奥へ伴ひ行くに、重門高く樓閣甍を
ならべ檐を聯ねたり。悉く七寶を鏤めて莊嚴せし金の臺珠の楮、心も詞も及ばれ
ず。寶池には優曇羅華、枸物頭華咲き満ちて妙香馥郁と薫り、琪樹列り異草生え、
靈禽和雅の音を發して妙法を轉り、寶幢幡蓋薫風に飄り、摩尼の燈火明かにして閃
爍と光り、甘露醍醐の飯食寶器に盛陳ねたり。さて殿前に一丈餘の錫杖を立て

て正面毎に丈餘の鼓磬を懸けたり。皆、刻限到れば揮撃たざれども己と微妙の音
を發す。殿中には龍猛菩薩坐したまひ、左右に十五位の金剛童子圍遶せり。又中
央の宮殿の裡に七寶莊嚴の床ありて、其上に龍樹菩薩、辨財天女の儼然として坐し給
へり。時に徳善大王佛前の香水を執つて小角の頂に灑ぎ、項を撫でて曰く、爾本
の所へ還り、力の及ぶ限り、意に任せて難山切所を開き、佛場と成せよと有りけれ
ば小角謹んで領掌し、九拜して退き出で、水上へ浮み上るかと思へば、愕然として
夢さめたり。小角大いに歡喜し、それより瀧の下の西の側なる荆棘を刈り拂ひ、
岩石を平げて草の堂を建て、等身の龍樹菩薩辨財天女の像を造りて、同年十月十七
日紅葉を折り薪を樵りて、開眼供養して安置し、又徳善大王十五の金剛童子等の像
をも造り護法神とし、堂の東西の隅に小祠を建て、安置し、然して晝は瀧の上にて
孔雀明王の呪を誦し、夜は瀧の下にて不動の呪を誦へ、山の花、澗の水を供し三
時の闍伽懈怠らず、三密の觀行に神心を凝し、鍊行苦修すこと二十年。是功德に

依て袷伽羅制多迦の二童子來つて晝夜に給仕し、又前鬼後鬼といふ山神常に仕へて、薪水を採りけり。されば小角神變奇特究りなく、能く空を歩み水を踏んで涉り、人の吉凶禍福を未前に察し、疾病有る者は呪符を與ふるに、奇病難病も治せずと云事なし。是に因て世人小角を活佛の如く敬ひ尊び、神變大菩薩とぞ稱しける。

役行者開基大嶺 得二前生劔杵一事

其後天智天皇六年乙卯、小角三十四歳にて和州大嶺を開きて勤修しけるが、或日峻き峯に分け登りけるに一個の骸骨あり。五體分散らず、長九尺五寸餘にて、左の手に獨股杵を握り、右の手に利劔を持ちて仰きに臥せり。其髑髏の眼中より樹木生え出でたり。小角是を見て其劔と杵を取らんとすれども、更に取ること能はず。小角甚だ怪み、不動明王に祈誓し、願はくは彼の劔杵を取得さしめ給へと丹誠を凝して祈り、不動の眞言を誦して日を暮らされけるに、頻に睡萌し、覺えず巖に倚りかゝりて眠みけるに、不動明王出現し給ひ、告げて曰はく、彼の骸骨は爾が

前生此山に鍊修して死したる所の遺骨なり。持つたる劔杵を得んとならば、千手陀羅尼三十遍、般若心經百卷讀誦し、然うして取るべし、と告げ給ふと思へば、夢さめたり。小角歡喜し、夢想の如く千手陀羅尼、般若心經を讀誦して後劔杵を取るに、果して骸骨自然ら手を開きて劔杵を授けけり。小角是を得て大いに怡び、生涯身を離さず所持せられけり。さて大峯より紀州熊野へ通る路を踏開き、三十八歳にして吉野の金峯山に登りて修行し、心を鍊ると數十年に及び、持統天皇丙申六十三歳、已に年老て葛城の嶺より金峯山へ到る路峻しくして稍々行惱まれければ、諸方の山神を驅集め、爾等葛城より金峯山へわたるべき岩橋を造れよと命せられけるにぞ、山神等命に従ひ岩石を運び、岩橋を造る準備をなしけるに、茲に一言主と云ふ神ありて、其形容甚だ醜かりしかば、晝出づることを恥ぢ、諸々の山神に告げて、白日は休み夜毎に橋を造りけり。是に因て岩橋の成就すること最遅かりければ、小角怒りて山神等を召集め、爾等何故橋を造る事を怠るやと責叱りけるに、

山神等曰く、一言主の神白日出づる事を厭ひ、我徒に告げて夜のみ橋を造らんとするゆる、橋の成就すること遅く候ふといひけるにぞ、小角大いに瞋り、一言主を呼出だし、神呪を以て兩腕を縛り、則ら誓うて曰く、將來我に等き修験の力ある者あらば、汝が此縛索を解得せしむべし。若し我に等き者なくんば、五十六億萬歳の後、彌勒出世の時、我解き得さすべしとて、遙の谷底へぞ投げやられける。

今猶金剛山の東に一言主の淵といふ所あり。されば歌にも

いかにせん糸の岩ばし中絶えぬ、明るわびしき葛城の神

とよみて、中絶ゆる戀の本歌とせり。かゝる神通力ある行者なれば、金峯山に末世の衆生を利益すべき本尊を造り安置せんと、三世諸佛に祈念し、一七日が間晝夜怠らず心經を讀誦して祈られけるに、七日満する曉、地藏菩薩出現し給ひけり。小角が曰く、斯様な柔輦の相にては、末世欲惡の衆生を化度し給ふこと叶ひ候ふまじとて、捉て遙に擲げられしかば、地藏菩薩即ち伯耆の大山へ飛行し給ひしとも

云ひ、或は吉野の投地藏といふは是なりとも謂へり。其後また一七日心經を誦して祈られければ、七日目の曉、彌勒菩薩出現し給へり。是も亦小角の意に合はざれば、劍を以て打拂ひ、三度目には眼を瞠り齒を切つて立行し、一七日が間心經を誦して祈られければ、七日満する曉に金剛藏王出現し給ふ。其相格色青く、忿怒の面、恐しく、左手に劍印を結んで腰を托へ、右手に三股杵を把つて立ち給へり。小角大いに怡び、是こそ末世の濁惡の凡夫を化度し給ふべき本尊なれとて、栢楠木を以て等身の金剛藏王の像を刻み、金峯山の釋迦窟に草堂を建て、安置し給ひけり。斯の如く勇猛の行者も時の不祥は免れ給ふこと能はず、不慮の災難こそ出來にけり。其故は和州の住人に從五位下韓國連廣足といふ者ありて、小角が神變奇特あるを見て、其門人となり道を修行しけるに、其勤行の行作甚だ嚴密にして堪へがたかりければ、廣足稍々心に倦みて修行を怠りけるを、小角大いに叱り散々に詈辱め

ければ、廣足赤面して退き歸りけるが、心中深く小角を怨みて、都に上り朝廷へ出で、役小角と申す者邪術を行ひ愚民を惑はし、財物を貪り取り候ふ、と天逆に讒奏しければ、朝廷の諸臣小角の徳を知らず、廣足が讒言を信じ、帝へ悪ざまに奏聞しける故、然らば其者を召捕らせよ、と詔し給へり。是に依て公卿武士に命じ、葛城なる小角が栖へ馳向ひ、召捕つて來り候へと令しければ、武士ども領掌して葛城山へ到り、小角に對面し、當今汝に御不審の儀まします間、急ぎ都へ參れよと言ひければども、小角敢て命に應せず。我は王の臣、王の民にもあらず、世捨人なれば、都へ召さるべき謂れなし、とて自若として起たざれば、武士大いに怒り、普天之下、王土に非ざる事なく、率土の濱、王の民に非ずと謂ふ事あらんや。今此山も王の國土なり。爾此山に栖めば即ち王の民ならずや、とぞ難じける。小角嘲笑ひ、此土王の國ならば立去るべし、とて、忽ち虚空へ飛上がり、空中に端然として坐しけるにぞ、武士ども惘果て擲捕る事あたはず、手を空うしてながめ居る許りなり。小

角是を見て微笑し、頓て雲を踏んで行方知らずなりければ、武士等案に相違し、如何すべきと商議するに、一人の者進み出で、我聞く、彼の小角に一人の老母あり。小角生得孝心厚く、諸國を経歴すれども、折々歸りて母を孝養すとぞ。されば彼の老母を捉へて都へ歸りなば、小角母を慕ひて都へ上り縛に就くべし、といふにぞ、衆士實も此策妙なり、とて、茅原の郷へ馳行き、小角の母、此とき母を捉へ、駕に乗せて都へぞ上りける。案の如く、役行者は母を人質にとられ、力なく、都へ上り給ひ、朝廷へ名告つて出で、縛索に就き候はん間、老母を免じ給へ、と願はれければ、即ち願に任せ、老母を免して故郷へ歸され、さてこそ小角を伊豆の大島へ流罪に行はれしなれ。

然れども神通自在を得給ひし行者なれば、晝は大島の配所に居給へども、夜は飛行して古郷へ歸り、老母を孝養し給ひ、或は富士筑波をはじめ所有難山絶所に遊行して、道を修し給ふこと以前に易らざりけり。廣足また心に想へらく、彼の小角國

の掟を犯せしにも非ざれば、遂に赦免を蒙り、我身に後難を及ぼすべし。不如公の手を借りて誅せんにはとて、又々高市王に讒して曰ひけるは、役の小角流罪に行はれしを怨み、配所にて帝を呪咀し奉る由其聞えあり。早く誅し給はずんば必ず天下の害をなし候ふべし、と告げけるに依て、高市王又此佞言に惑はされ、翌年十月廿五日武士を伊豆の大島へ下し、小角を糺明し、帝を調伏し奉ること誠ならば誅戮すべし、と命ぜられる。然るに廣足武士に賄賂を贈り、小角を誅すべきやう頼みけり。武士心得て大島へ下り、一應の糺問にも及ばず、小角を曳出し、斷罪すべしとの勅命なり、と偽事の宣命を讀聞かせければ、行者少しも恐るゝ色なく、敷皮のうへに端坐し、手に大日の印を結び、口に不動の眞言を唱へ、自若としておはしける。太刀取りの武士其後へ廻り、太刀を揚げて首を丁と斬るに、恰も磐石を切るが如く、太刀は二段に折れ、行者は安然たり。太刀取、是は太刀の悪かりし故ならん、と太刀を取替て、再び曳と掛け聲して斬るに、又三段に折れて、行者は猶

は悠然たれば、有合ふ武士ども惘果て忙然たり。其時行者徐に顧み給ひ、先に讀みし宣命に帝を呪咀し奉る罪に依て死罪に行ふあれど、我曾て帝を呪咀せし事なし。修する所は天下安全のみなり。然るに爾等罪なき我を誅せんとす。是三寶の大賊なり。若し強ひて我を斬らんとせば、却つて禍ひ爾等が身に及び、且又宇宙三年の間大旱魃して、萬草盡く種を亡ふべし、と仰せけるにぞ、武士ども大いに恐れ、衆士行者に罪をわびて、都へかへり、行者の告げ給ひし儘を奏聞しければ帝大いに驚き給ひ、博士を召されて卜はせ給ふに、博士是を卜うて、彼の人素より罪なく、大聖者にて凡人に非ず。急ぎ罪を免じ、尊敬し給ふべし、と奏聞しけるにぞ、帝深く御後悔まじしく、大島へ勅使を立て、行者の流罪を赦免あり。都へ召上して御尊敬させられ、彼の廣足は無科き聖者を讒害せんと巧みし條無道なりとて、官を剥ぎ、領地を沒收し、追放し給ひけり。是より役行者の驗徳倍々世に高く聞え、歸依する者愈々多し。

行者は勅免を得てより、憚る所なく天下を経歴し、山城國にては愛宕山、攝州には鬼取山、伯耆大山、筑紫の彦山、加賀の白山、越中の立山、羽州の羽黒山、其餘人の通はざる難山高山を開きて、佛場となし給ふ所枚擧に遑あらず。其後文武天皇の大寶元年辛丑、行者六十八歳にて老母を鐵鉢の内に坐せしめ、是を携へて漢土へ飛び渡り給ひ、其終る所を知らず。實に本朝の神仙とは役の行者を謂ふべし。後年道昭律師入唐して諸所の靈場を廻り、新羅寺にて法華經を講せられし時、仙客多く來りて説法を聽聞せしに、其中に一人の神仙倭國の語を以て道昭と經説を議論しけるゆゑ、道昭怪み、我本國の語に通じ給ふ御身は何人ぞと問ふに、仙人答へて曰く、我は日本の大行者役の優婆塞なりと。道昭駭き、さては聞及びし役の小角にて在すかや、とて、高座を下り、倭國の事を語り合ひて時の移るを覺えず。其話の中に行者が曰く、我此唐山へ來つて年月を送るといへども、三年に一度づつは必ず倭國に歸り、金剛山、葛城金峯山、富士山等にて道を鍊修す。是日本の國恩を

忘れざるゆゑなりと語りて去りしとぞ。

因に曰、役行者唐山へ飛去り給ひし後、年月立つて大峯に大蛇栖み、登山する者を取喰ひければ、諸人恐れて峯入する者なく、さしも役行者の遺跡毒蛇の栖となりたり。然るに人皇六十代醍醐天皇の御歸依僧聖寶僧正と申すは、光仁帝の御孫にて在しけるが、大勇猛の名僧にて修験の道を好み、役の行者の跡を慕ひ、所有名山靈地を経歴し給はざる所もなし。然るに大峯は毒蛇栖んで峯入りする者なしと聞き給ひ、大斧を持つて葛藟を刈拂ひ、大峯へ分け登り給ふに、果して大蛇出て僧正を呑まんとするを、聖寶師少も恐れ給はず、持つたる大斧にて毒蛇を寸々に斬殺し給ひ、再び大峯を開き、熊野へ通る路をも平らげ給ひけり。さるに依て諸人また大峯へ山上する事を得たり。三寶院派の符に斧を附くるは此謂なり。修験道の行者に本山派當山派の二流あり。本山派は天台宗にて聖護院派なり。當山派は眞言宗にて醍醐三寶院派なり。聖護院派は七日を峯

入の時とし、三寶派は八月を峯入の時とす。夏に峯入するは兩派とも逆の峯入と謂へり。

因に曰く、大峯の鐘掛は絶壁十丈行場第一の難所なり。往昔誰が所爲とも知らず此所に一つの鐘を掛けたり。鐘の銘に曰く遠江國佐野郡原田村長福寺、天慶七年六月二日とあり。其の由来を尋ぬるに、其頃遠州原田村長福寺の門前に一人の山伏あり、身貧にして峯入すること能はざりしかば、長福寺の住僧是を憐みて、毎年路銀の合力して峯入せしめける。其後住僧年老いて隱居し、後住に寺を譲りけり。其後住富めること先住に倍せり。然れども慳吝くして彼の山伏に敢て路銀を借さず、僞つて曰く、當寺には鐘の外金銀といふものなしと。是に依て山伏は其年峯入すること能はざるを歎きけるに、或夜一人の年老いたる山伏來りて、長福寺の鐘を提げて虚空を飛行し、大峯の絶壁の巖の上に件の鐘を掛置きしとぞ。それより其所を鐘掛と號しける。彼の老いたる山伏は役の

行者の化身なるべし。この外末世の今に至るまで、役の行者の奇特を現はし給ふこと數しれず、神變大菩薩と稱し奉るも宜なりけり。

1519

大正六年五月一日印刷
大正六年五月五日發行

役の行者與付

定價金八拾錢

不許複製
著作權
所有
無斷禁興行

著者 坪内雄藏
發行者 小倉武雄
印刷者 本間十三郎
東京市芝區芝公園九號地ノ二號
東京市牛込區榎町七番地

發行所

東京市芝區芝公園九號地ノ二號

立文社

電話芝、六六九七、二四九九
振替東京一四一七七番

